≪公開シンポジウム 2026-②（月例サロン通算 360 回）報告≫

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

DUO リーグの 30 年を語ろう！

ユースサッカーリーグの成果と課題と副産物

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

名　称　：NPO サロン 2002 公開シンポジウム 2026-②
　　DUO リーグの 30 年を語ろう！－ユースサッカーリーグの成果と課題と副産物
主　催　：特定非営利活動法人サロン 2002
共　催　：DUO リーグ
後　援　：（一社）子ども未来・スポーツ社会文化研究所（FCSSC）、日本部活動学会
日　時　：2026（令和 8）年 10 月 10 日（土）　14：00～17：00（13：30 受付開始）
会　場　：郁文館高等学校 220 番教室　https://www.ikubunkan.ed.jp/access/#map
　　注）オンラインでも参加できます（参加申込された方に Zoom の URL をお送りします）
登壇者　：岸　卓巨（(一社)A-GOAL 代表／日本アンチ・ドーピング機構職員／都立小石川高校 OB）
　　瀬田 元吾（水戸ﾎｰﾘｰﾎｯｸ取締役 執行役員、事業統括本部長、GM 補佐／学習院高等科 OB)
　　中澤 篤史（早稲田大学教授／東京大学ア式蹴球部 OB）
　　中塚 義実（特定非営利活動法人サロン 2002 理事長／DUO リーグ初代チェアマン）
参加費　：1,000 円（サロン 2002 ファミリーと学生は無料）
参加申込：Peatix よりお申し込みください
報告書作成：中塚義実
　注）写真・スライドは、各発表については発表者が、その他は NPO サロン 2002 が提供

＜目次＞

オープニング 4
第1部．講演　中塚義実「DUOリーグのはじまりとあゆみ」 5
　１．問題意識－自身のあゆみから 6
　２．DUOリーグのあゆみ 10
　３．いま思うこと 29
第2部．元DUOリーガー座談会「DUOリーグの成果と課題と副産物」 31
　１．中澤篤史：DUOリーガーから部活研究者へ 31
　２．瀬田元吾：ドイツ×DUOリーグ 32
　３．岸　卓巨：高校時代の居場所から、ケニアの子どもたちの未来へ 33

補足資料　DUOリーグのあゆみ－30周年シンポジウム用 ..... 45～46

【キーワード】DUO リーグ、U-18 サッカー、ユースリーグ、リーグシステム、スポーツ環境、部活動改革、FCSSC、日本部活動学会、中塚義実、中澤篤史、瀬田元吾、岸卓巨、部活動研究、ドイツ、A-GOAL、サロン 2002

公開シンポジウム 2026-②参加者　計 34 名（敬称略）

注）名前の前の記号は、◎NPOサロン2002会員、○会員外のｻﾛﾝﾌｧﾐﾘｰ、無印はｻﾛﾝﾌｧﾐﾘｰ外

【会場での対面参加】（23名）

○安藤裕一（(株)GMSSヒューマンラボ）、○磯和明、井上豪（郁文館高等学校）、岩野英明（本郷高校）、○大河原誠二（筑波大附高サッカー部OB、桐窓サッカー倶楽部、サッカークラブ桐一族）、太田克利（筑波大学大学院教育学修士1年）、大野達也（目白ジュニアサッカークラブ監督／筑波大附高サッカー部OB）、小澤亮二（三重県サッカー協会技術委員会・47FAチューター）、香取勇希、○岸卓巨（A-GOAL）、◎熊谷建志（NPOサロン2002理事）、○新谷十穏子（郁文館高校2年）、○鈴木崇正（編集者・記者）、瀬田元吾（株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック）、玉生謙介（学習院高等科、全国高体連サッカー専門部）、永井直樹（昭和第一高校）、中澤篤史（早稲田大学）、◎中塚義実（NPOサロン2002理事長／DUOリーグ初代チェアマン）、○野田直広（富士電機・早稲田大学）、早川幸治（豊島学院高校）、望月昇（以前に複数年代にサッカー指導経験あり）、○吉村将（中央大学4年）、ほか1名

注）このほか第1部のみ、郁文館高校サッカー部員12名が参加

【オンライン参加】（11名）

小野朔矢（筑波大学附属高校蹴球部OB・コーチ／早稲田大学政治経済学部1年）、加藤寛（株式会社スポーツシューレこうべ）、◎小池 靖（株式会社バイタル）、◎笹原勉（日揮台湾支店）、田上規（中央区立豊海小学校副校長、筑波大附高サッカー部OB）、○高平豊明（サッカー文化フォーラム）、○田中俊也（三日市整形外科）、◎土谷享（サロン2002理事、美術家ユニットKOSUGE1-16）、○遠山諒（筑波大附高サッカー部OB）、◎本多克己（NPOサロン2002副理事長）、水上博司（日本大学）

登壇者プロフィール

【演　者】

◆岸　卓巨（(一社)A-GOAL代表／日本アンチ・ドーピング機構職員／都立小石川高校OB）

1985年東京都生まれ。東京都立小石川高等学校入学の2001年より、サッカー部の選手兼マネージャーとしてDUOリーグに関わる。高校時代は優秀審判賞を3度受賞。中央大学在学中はDUOリーグとサロン2002の事務局を務める。大学卒業後、㈱公文教育研究会で北海道釧路市に赴任。その後、JICA海外協力隊の研修期間中に起きた2011年3月の東日本大震災ではボランティア活動に従事。同年6月より2013年6月まで青年海外協力隊員としてケニアに赴任。帰国後、日本政府が主導するスポーツを通した国際協力事業「Sport for Tomorrow」プロジェクトの立ち上げに従事。2018年からJADA職員としてアンチ・ドーピング対応業務に携わる。

2020年のコロナ禍において、ケニアの友人からの一報を受け、スポーツで地域を救うことを発案。仲間とともにA-GOALプロジェクトを創設。いまではキベラ地区の青少年サッカーリーグや食事の提供、企業連携、スタディーツアーなど、幅広い活動に取り組む。2025年8月に在日アフリカ人ネットワーク（ADNJ）アワード受賞、2026年2月にスポーツ庁長官感謝状受賞。

◆瀬田元吾（水戸ホーリーホック取締役執行役員／学習院高等科OB）

1981年東京都出まれ。学習院中等科を経て高等科に入学した1996年度の後期から加盟したDUOリー

グに1年次から出場。また地区選抜選手としても活躍した。筑波大学蹴球部ではAチームでも活躍。

2003年3月の大学卒業後も現役選手を続け、2005年に渡独。フォルトゥナ・デュッセルドルフのサテライトでプレー。2008年から同クラブのフロント入りし、日本デスクを設立。ドイツ3部リーグからブンデスリーガ1部までをフロントスタッフとして経験した。

2014年には、サッカーを中心としたスポーツ活動を通じて「日独の架け橋」となることを目標として、ドイツにSETAGS社を設立。デュッセルドルフ国際ユース大会などで日本向けの窓口を担当。また日本では2016年に中央大学の客員企業研究員となり、スポーツビジネスを学ぶ学生のための授業設計にも関わり、2020年にはフォルトゥナ・デュッセルドルフと中央大学のカレッジパートナシップ締結を実現させた。さらに2025年9月には同大学の客員講師に就任し、2027年度から新設されるスポーツ情報学部の客員教授就任も内定している。

他方、2020年8月に15年半過ごしたドイツから本帰国し、V・ファーレン長崎の執行役員として1年間活動し、2021年12月から水戸ホーリーホックへ参画し、事業戦略執行役員としてクラブの新しい価値作りに取り組み、2025年にはJ2優勝、J1昇格にフロントとして貢献した。2026年からは取締役執行役員／事業統括本部長／GM補佐として、更なる挑戦を続けている。

◆中澤篤史（早稲田大学教授／東京大学ア式蹴球部OB）

1979年大阪生まれ。東大寺学園高校卒、東京大学理科Ⅰ類入学、東京大学教育学部卒、東京大学大学院教育学研究科修了。教育学博士。

一橋大学大学院社会学研究科講師・准教授を経て、2016年より早稲田大学スポーツ科学学術院准教授、2022年から同教授。スポーツ・身体・人間に関連する社会現象を、社会学を中心とした社会科学的アプローチから探究し、とくに運動部活動のあり方や問題などを研究している。主著は『運動部活動の戦後と現在：なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』（青弓社、2014）、『そろそろ、部活のこれからを話しませんか：未来のための部活講義』（大月書店、2017）、『「ハッピーな部活」のつくり方』（内田良との共著、岩波ジュニア新書、2019）など。趣味はコーヒーと囲碁。

東京大学ア式蹴球部がDUOリーグに加盟していた2001年度に選手として出場。この頃から部活動のあり方について問題意識を持つ。

2016年度より全国高等学校体育連盟研究部活性化委員会アドバイザー（現在に至る）。

【コーディネーター兼】

◆中塚 義実（特定非営利活動法人サロン 2002 理事長／DUO リーグ初代チェアマン）

1961 年生まれ。大阪府立三島高校、筑波大学体育専門学群・同大学院を経て 1987 年より筑波大学附属高校保健体育科教諭・蹴球部顧問。2024 年度末まで 38 年間、異動することなく勤務。1995 年度より東京都サッカー協会フットサル委員（ユース部会長）。1996 年度に東京都内でユースサッカー「DUO リーグ」を創設。1997 年度よりサロン 2002 の活動開始。2014 年度に NPO 法人化。

2024 年度末の退職後は、週 2 日の大学非常勤講師とともに、ユース年代のフットサルやオリンピック教育、日本部活動学会、サッカーの歴史社会学的研究や執筆に取り組むが、メインは NPO サロン 2002 の諸活動。シニアサッカー現役選手として、いまも東京都シニアリーグでプレーを楽しむ。

オープニング

井上：皆さんこんにちは。本日は特定非営利活動法人主催の公開シンポジウム「DUOリーグの30年を語ろう！－ユースサッカーリーグの成果と課題と副産物」にご参加いただきましてありがとうございます。司会を務めさせていただきます、郁文館高校サッカー顧問の井上と申します。

シンポジウムの開会にあたり、主催団体を代表し、副理事長の本多克己様より開会挨拶を頂戴したいと思います。

本多様は本日、オンラインで神戸から参加していただいております。DUOリーグのホームページ立ち上げ等にご尽力いただいた方でございます。それでは本多様、よろしくお願いいたします。

本多：ご紹介いただきました。特定非営利活動法人サロン2002副理事長の本多です。本日はサロン2002公開シンポジウムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

今回はDUOリーグ30周年を記念してのシンポジウムです。リーグを立ち上げ、支えてこられた皆さん、本当にお疲れ様でした。そして30周年おめでとうございます。

私自身もリーグの公式ホームページの管理運営に関わってきました。30年前は、メールでやり取りをしたり、ホームページがあるということだけでも先進的な時代だったわけですが、いまではSNSに進歩して、コミュニケーションの手法も全く変わってきた感があります。

本日のシンポジウムでは、リーグの歩みを振り返ることに加えて、どんな目的、どんな思いを持ってこのリーグが設立されたのか、なぜこのリーグが必要なのか、さらにはリーグとは何なのか、そういった、時代が変わっても変わらない不易なお話をお伺いできるのではないかと大変楽しみにしております。

以上、簡単ではございますが、主催者の挨拶とさせていただきます。。

井上：本多様、ありがとうございました。

■開会挨拶：NPOサロン2002副理事長　本多克己
■シンポジウム
第1部　講演「DUOリーグのはじまりとあゆみ」中塚義実（約1時間）
　１．問題意識－自身のあゆみから
　２．DUOリーグのあゆみ
　　１）“遊び心”に満ちたリーグ創設期（1996～）
　　２）“公認化”へ向けて（2000～）
　　３）“遊び心”を取り戻すために
　３．いま思うこと
第2部　座談会「DUOリーグの成果と課題と副産物」（約2時間）
　１．中澤 篤史（早稲田大学教授／東京大学ア式蹴球部OB）
　２．瀬田 元吾（水戸ﾎｰﾘｰﾎｯｸ取締役 執行役員／学習院高等科OB)
　３．岸　卓巨（(一社)A-GOAL代表／都立小石川高校OB）
■閉会挨拶：DUOリーグチェアマン　永井直樹

それでは本日の流れでございます。全体は第1部と第2部に分かれております。

第1部は講演ということで、NPOサロン2002の理事長でもあります中塚義実様より、DUOリーグのはじまりとあゆみと題して講演をいたします。1時間ほどを予定しております。

続いて第2部は、座談会と書いてありますが、1時間半から2時間ほど、元DUOリーガーの演者にお話しいただきます。ご登壇いただきますのは、早稲田大学教授で東京大学ア式蹴球部OBの中澤篤史様、水戸ホーリーホック取締役執行役員で事業統括本部長・GM補佐、学振高等科OBの瀬田元吾様、そしてA-GOAL代表で日本アンチ・ドーピング機構職員、都立小石川高校OBの岸卓巨様でございます。

それでは第1部を開始したいと思います。

初代DUOリーグチェアマン、主催団体のNPOサロン2002理事長の中塚様より講演をいただきます。

第 1 部．講演　中塚義実「DUO リーグのはじまりとあゆみ」

◆はじめに

改めまして、皆さんこんにちは。今日はお集まりいただき誠にありがとうございます。筑波大学附属高校の教員を去年の3月末まで38年間、異動することなく勤めてきました、NPO法人サロン2002理事長の中塚です。

DUOリーグの30年という節目にあたり、この場を設けることができ、大変嬉しく思っております。いまは高校の教員ではありませんしDUOリーグから離れてだいぶ経つので、いまは「30周年おめでとうございます」と、横から言わせていただく立場になります。

ただ、離れてはいてもDUOリーグのことは気になるし、DUOリーグだけでなく、日本のユース年代のサッカー、スポーツがどこへ向かおうとしているのかに関しては、依然として高い当事者意識を持っています。見守るだけでなく、関わり続けたいと思っています。今日のシンポジウムも、口うるさいおっさんが昔話をごちゃごちゃ言っているということでいいんですが、少しでも自分たちにつなげられるものがあれば、汲み取っていただきたいなと思います。

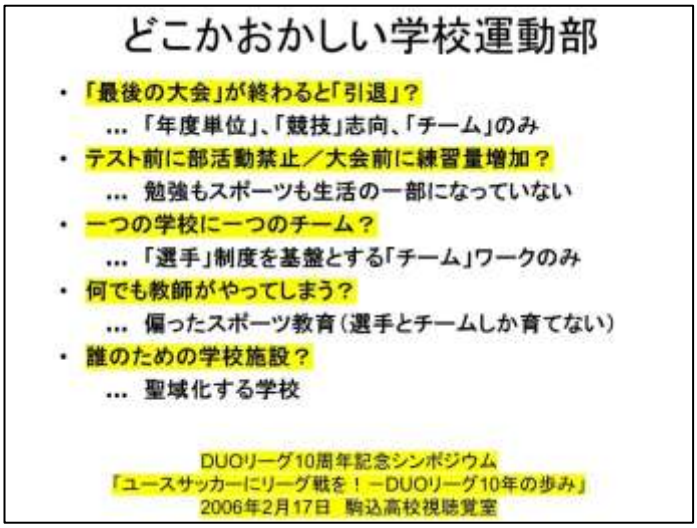
持ち時間は1時間です。皆さんからのコメントも随時いただきたいところですが、かなりのボリュームになってしまったので、さっさと中身に入っていきます。



似たようなことを20年前にやっています。DUOリーグ10周年シンポジウムです。郁文館からすぐ近くの駒込高校視聴覚室で開きました。登壇者はなかなか豪華でした（右写真）。20年前の私の隣にいるのが、当時、 Jリーグの各クラブの育成組織をしっかりやっていこうということでできたプロジェクト、Jリーグアカデミーのリーダーをされていた山下則之さん。サロン2002会員でもあります。Jリーグアカデミーにも、DUOリーグは影響を与えています。

そしてDUOリーグの名付け親である上野二三一さん。小石川高校の顧問から、当時は日比谷高校に移っておられたと思います。全国高体連サッカー専門部長をされていました。今日は会場に現部長も来られています。

上野さんのお隣には三菱養和コーチの漆間信吾さん。DUOリーグは学校とクラブユースの垣根を越えてやるんだということです。私と同い年の漆間さんは、先日三菱養和を定年退職し、いまは東京都サッカー協会副会長をされています。こういう人たちで、会場の人も巻き込んで10周年を振り返り、次への道し



るべにしていこうという会でした。

内容をまとめた冊子を改めて読んでみました。このころから、スライドにあることを言っていました。「どこかおかしい学校運動部」です。こういうことが原点になっています。

「最後の大会が終わると引退？」。会場には郁文館高校のサッカー部員がいますが、君たち、最後の大会が終わって「引退」なんて言ってないよね。アマチュアに引退はありませんよ。私も65歳になるけど、今年からシニアサッカーのチームに入ってプレーしています。なぜ「引退」という言葉になるのかというと「年度単位」で「競技指向」の「チーム」しかないからです。おかしいですね。

「テスト前に部活動禁止／大会前に練習量増加？」。テスト前に部活動を禁止して勉強してくださいというのはおかしいですよね。勉強は普段からすることで、テスト前だからするということではありません。練習も同じで、普段からすることであって、大会前に増やすことではありません。

「一つの学校に一つのチーム？」。「選手」制度を基盤とする「チーム」ワークしかありません。

高校生はあまり気がつかないと思うけど、「何でも教師がやってしまう？」。DUOリーグ立ち上げのころは、やりたくてやっている教師がほとんどだったから問題にはならなかったけど、いまはそうもいかず、部活動改革、地域展開が中学から始まっています。他人事ではありません。高校にも波及するし、公立だけじゃなく私立学校にも及びます。全国的にそういう動きが起きています。

「誰のための学校施設？」。日本の場合、スポーツ施設を持っているのは学校です。それが使われていない時間が、実は結構ある。体育施設だけじゃなくて教室も。そういうところを地域で活用してもらえば、もっと豊かな環境になるのに、というのが10周年のシンポジウム、あるいはDUOリーグをはじめた30年前から言っていたことです。

今回のシンポジウムにあたって、演者とオンラインで何度か打ち合わせをしました。そこで話しているうちに、中塚がなぜこのような疑問にたどり着いたのかを知りたいという空気を感じました。そうすると私自身のあゆみから語っていかなアカンなと思いました。

長くならないように注意しながら、この部分を導入として話させてもらい、そのあとで「DUOリーグのあゆみ」を30年分、ポイントをピックアップしながらお話しします。

最後に、「いま思うこと」を語りたいなと思います。

１．問題意識－自身のあゆみから

◆自分自身のあゆみ

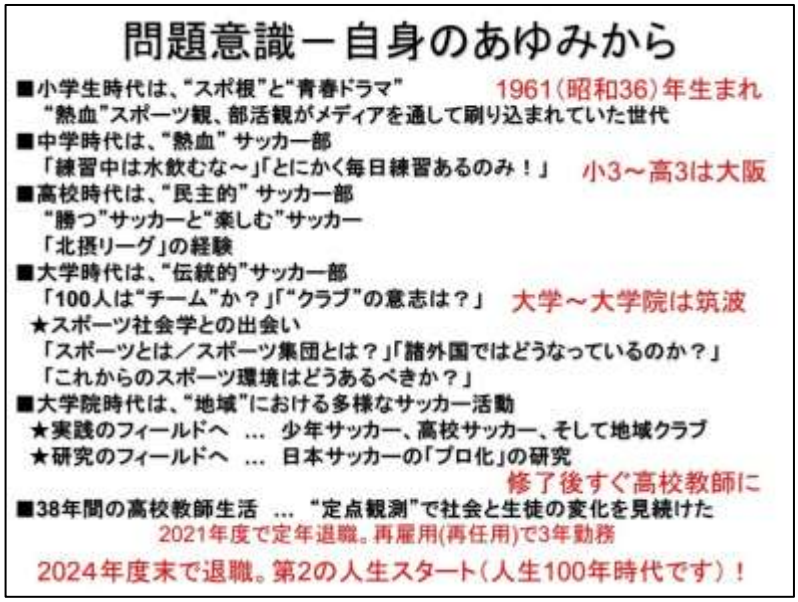


今日は同世代の方も何人かおられますが、65歳になって孫もいるおじいさんです。

いまの高校生にはピンとこないかもしれないけど、私たちが小学校に入学したころ、『巨人の星』という漫画が少年マガジンで始まりました。アニメでも始まりました。そこで描かれたのは、汗と涙と根性の物語です。他にもいろいろスポ根漫画が出はじめて、スポーツは楽しいというよりも、めちゃくちゃ厳しくしごかれた先の何かを求めるようなスポーツ観が植え付けられていったと思います。

小学校高学年になると、テレビで青春ドラマが始まります。高校サッカー部やラグビー部が舞台です。こういう部活にやんちゃな奴らが集まっていたからだと思います。そこに若い熱血先生が赴任して、熱い学校生活を繰り広げるわけです。部活の話が中心で、友情物語や恋愛話が挟まってきます。喧嘩してぶつかり合いながらスポーツに夢中になり、と

もに汗と涙を流す。よくわからないけど、運動部活動の良さみたいなものをすごく印象付けられた状態で小学校を卒業し、いよいよ中学から部活が始まるという年代です。



大阪府茨木市立南中学校という、新興住宅地にできた学校に入りました。私が8期生です。ちなみに高校も8期生で、大学は7期生です。入ってみると、青春ドラマで見た通りのサッカー部でした。大阪体育大学卒の牛みたいな、強くて怖そうな先生が顧問です。当時の大阪の公立中には悪そうな奴らがいっぱいいましたが、その中でもやんちゃなのがサッカー部に集まっていました。顧問の先生にビシビシしごかれ、非科学的なことを山ほどされながらのサッカー部でしたが、嫌な印象はまったくありません。先生は怖いけど面白い面もあり、みんな懐いていましたし、部員はみなサッカー好きで、一緒にいるのがとても楽しかった記憶があります。この年になってようやくこの頃の同窓会が始まっていますが、昔話で盛り上がります。めちゃくちゃな話ばかりですが、とても楽しいですね。求心力の高い中学のサッカー部で、私はサッカーの虜になっていくわけです。

高校は大阪府立三島高校で、もちろんサッカー部に入ります。最初の練習で1年生はほとんど球拾いでしたが、練習後に「1年生集合」と、3年生のキャプテンから声がかかります。「振り落としのしごきが始まる」と身構えましたが、そうではなく訓話でした。「サッカーにはな、勝つサッカーと楽しむサッカーがあるんや。どっちを選ぶかはお前ら次第やぞ」という話です。何のことかわかりませんでした。三島高校サッカー部は、当時のもう一つの流行りと言える、民主的部活動でした。いまなら「ボトムアップ」と言われる、キャプテンを中心に部員が練習を進め、試合のメンバーも決めるものです。後にわかったのですが、こうした部活動のあり方は、東京教育大学サッカー部で成田十次郎先生が監督をされたころの取り組みが原点にあります。

けど、中学の頃からうまくなるために、勝つためにサッカーをやってきた私は、「勝つサッカーと楽しむサッカー」と言われてもピンときません。1年後に自分がキャプテンになってからも「勝つために」ビシビシとやっていました。するとあるとき、6月ごろだったと思いますが、下級生10人ぐらいが私のところにきて、「中塚さんの勝つサッカーについていけません。僕らは楽しむサッカーがやりたいんです」と、退部届を持ってきました。退部届を主将に出すというのも変な感じですが、そんなことがありました。「俺と違う考えでサッカーに取り組むやつがおる」ということに初めて触れたのがこの時です。ただ、彼らの言っている意味が、当時はわかりませんでした。「勝つことが面白いんじゃないの？」と思っていたからでしょう。スポーツという文化の広さや深さをわかっていなかったのだと思います。彼らは退部し、サッカー部は引き続き、勝つために厳しくやっていく方針で、部員同士しょっちゅうぶつかりながらも3年間過ごしました。

高校時代のトピックとして、北摂リーグというリーグ戦を経験したことも挙げられます。ユースリーグは、DUOリーグが全国初というわけではありません。いろんなところでリーグ戦は行われていました。北摂リーグは毎年秋の、大会がない時期にあり、茨木、高槻、摂津あたりの府立高校の先生方で相談してやっていたのでしょう。1年のときは三島Bでボロ負けの連続でしたが、2年次は三島Aでい

い成績を収めることができました。

そんな高校時代も、そろそろ進路を考える時期になります。大学をどうするか考えるときも、やはりサッカーのことしか頭にありません。当時、日本で一番強い大学が、インカレで優勝した筑波大学でした。成田先生や大商大の上田亮三郎先生など、お世話になった先生方はみな東京教育大学、いまの筑波大学のOBだったこともあり、筑波大学に進学し、もちろんサッカー部に入ります。

当時の部員は100名です。Jリーグが始まる前ですから、各都道府県の一国一城の主が集まってくるような感じでした。けど100人が試合に出られるわけではありません。大学のユニフォームを着て出られるのは先発の11人＋α。その他大勢に公式戦の機会はなく、学年が上がるにつれてモチベーションが低下していく様子を部の中で感じていました。



「100人は“チーム”か？“クラブ”の意思は？」とスライドにありますが、こういう言葉が出てくるようになったのは、スポーツ社会学との出会いからです。授業で「スポーツとは」「チームとクラブ」の話があって興味を持ちました。大学3年次にスポーツ社会学研究室を選択したのも、高校時代の「勝つサッカーと楽しむサッカー」のころから漠然と問題意識があり、それが研究室選択につながったのだと思います。100人のサッカー部をチームワークでまとめるのは無理がある。スポーツ社会学で学んだことが、自分の実体験とあわせて理解できました。

教育実習は小石川高校でした。「東京の教員ってええなあ」と漠然と思い、そちらに向かう選択肢もあったかもしれないけど、「このまま先生になってしまうのは“でもしか”や」と。教員に“でも”なろか、ではなかったけど、教員に“しか”なれない「しか先生」かもしれないと思いました。教員につながる勉強“しか”しかしていませんでしたから。そんな思いもあって、すぐには就職しないで猶予期間を設けて、大学院に行かせてもらいました。

院生のころは、つくば地域の少年サッカーや高校サッカーの指導に加え、「ジョイフル本田」でプレーして、「バルバロス」というおかしなクラブを作って活動していました。今日も当時からのメンバーが、オンラインも含め何名か来ています。

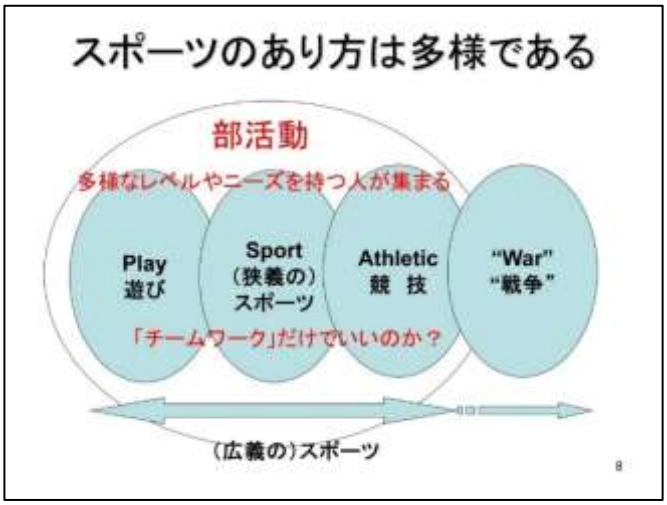
大学院生なので研究もします。日本のサッカー界が徐々にプロ化に向かっていく中で、そのことを研究テーマに選び、3年行った修士課程を終え、ご縁があって筑波大学附属高校へ。38年もの間、異動することなく定点観測を続け、昨年3月末で退職し、いまに至るということです。

私自身の歩みの中に、冒頭申し上げた10周年シンポジウムで言った問題意識の原点がたくさんあるのだと思います。忘れてましたけど、「中塚さんは昔からリーグ戦のことを言っていたよね」と言われます。そう言えば昔からそんなことを言っていたかもしれません。思い出してきました。

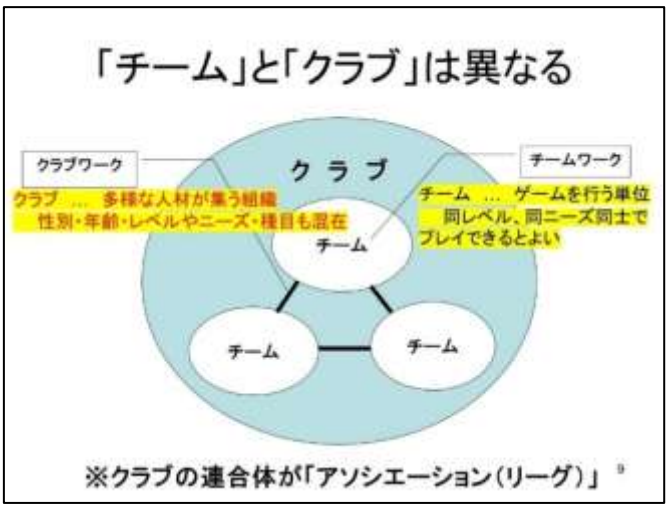
◆スポーツ社会学での学びから

スポーツ社会学で学んだことの要点だけを共有しておきたいと思います。

「スポーツのあり方は多様である」ということです。どうしても「競技」、勝ち負けや結果のところばかり目が行きますが、本当はそれだけじゃないんです。やりたい時にやってやめたい時にやめられる「遊び」の段階から、やっている時空間が楽しくてたまらない「（狭義の）スポーツ」、そして結果に第一の関心が向けられる「競技」。その先には、自分が属する集団や組織の看板を背負って戦う「戦争」と言える段階。例えば国家や民族、宗教の対立を、サッカーの形をしながらやっている段階です。こういうことも、広い意味でのスポーツに含まれます。



学校の部活動でいうと、プレイ志向から競技志向まで、意識の違う人たちが一つの部にいるわけです。それをチームワークだけでまとめられるのかということです。「チーム」というのはゲームを行う単位です。だから、似たようなレベルやニーズでチーム編成して活動すればハッピーになるんです。けど異なるレベルやニーズを持つ人はもちろんいます。チームは、似た者同士で作ればいい。男子チームや女子チーム、中学生・高校生・卒業生チーム。あるいはサッカーチームとバスケチーム…。大事なのは、それら全部をひっくるめた「クラブ」を育て、そこが母体になっていくことです。チームとクラブの概念を、言葉だけでなく運営面でも整理しながらともに育てていこうということです。





リーグ戦とカップ戦の違い

カップ戦	リーグ戦
ノックアウト方式 （負ければ終わり）	総当り方式 （負けても次がある）
短期間	長期間
シーズン中の単発イベント	シーズンそのものを形成
非日常的な行事	日常生活の一部
移動をともなう	生活圏で行なわれる
主催者が運営	当事者による自主運営 (Home & Away)

残念ながら、いままでの日本の部活はチーム単位で勝ち負けをやってそれでおしまいでした。私が勤めた筑波大附属高校蹴球部は、何年かやっているうちに、女子チームやフットサルチームができ、一つのクラブとして活動しています。卒業生も年齢ごとにチームを作ってOBサッカーをやっているので、それも含めた多世代型クラブになっています。みんなで集まって初蹴りをしたり、多様な活動ができていました。これも後にわかったことですが、筑波大学附属高校の前身校で明治から大正期に校長をされていた嘉納治五郎は、部活動の連合組織「桐陰会」を組織して課外活動を展開していました。柔道部も野球部も蹴球部も、桐陰会の一部門です。つまり多世代・多種目型のクラブです。こういうことが、歴史を学ぶとわかってきます。

また、リーグ戦とカップ戦についても、スポーツの社会学や歴史を学ぶ中で整理できます。

カップ戦は、負ければ終わりのノックアウト方式で、短期間でチャンピオンを決めるためのやり方

で、主催者が運営します。一方で、リーグ戦はシーズンそのものを形成し、日常生活の一部です。生活圏で行われ、当事者による自主運営です。リーグ戦によってクラブが育つのだということです。

これも歴史を見ればわかります。イングランドで1871年にFAカップがはじまり、1863年にFAが定めたサッカーが浸透します。1888年にはじまったフットボールリーグ（FL）で、毎週末、ホームアンドアウェイで試合をするようになり、サッカーは生活の一部となります。日本サッカーリーグも同様です。1965年に社会人の全国リーグができ、社会人生活を送る中でトップレベルのサッカーが展開されるようになりました。そのうちアマチュアリズムの限界がみえてきてプロ化が進行し、1986年のプロ制度導入、1993年のJリーグ発足につながります。けどユース年代のリーグ環境はありませんでした。

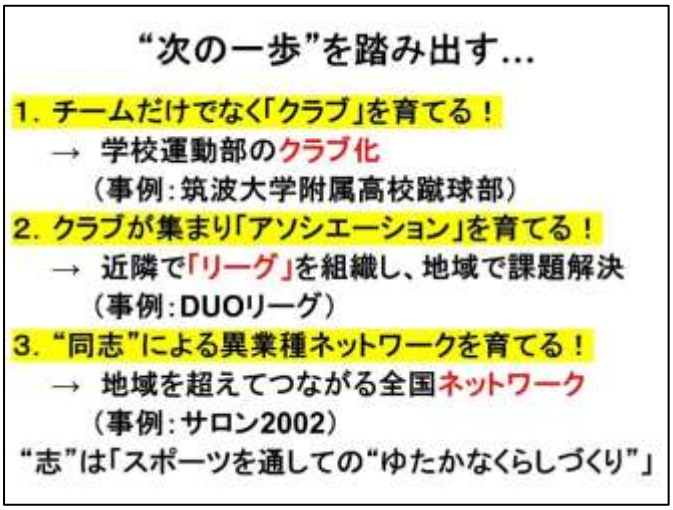
こういうことが、スポーツ社会学を通して学んだことです。

２．DUOリーグのあゆみ

◆高校教師になったころ

「学校現場に行くとどっぷりつかるやろな」と思いながら、1987年度に筑波大学附属高校に赴任します。当時から、この学校では部活動は週4日以内でした。DUOリーグはありませんが、週末はたいてい練習試合をしていました。私自身は東京教員チームの現役プレーヤーだったので、部活に出ることは自分自身のトレーニングでもあります。体育実技や体育理論の授業は本業なので力を入れました。初年度は担任もなく、放課後は部活動。教員になりたてなので、やることなすこと全てが新鮮で、学校にいる時間は長かったですね。予想通り、どっぷり浸かっていました。

日本サッカー界全体をみてみると、1986年のメキシコW杯は最終予選で韓国に敗れ、1988年のソウル五輪予選も中国に敗れて出場を逃します。オリンピックにもワールドカップも出られない時期で、このままではアカン、プロサッカーを作ろう、2002年のワールドカップは日本でやろうという動きが始まってきた頃でした。



高校教師として、最初のころは目の前のことに精一杯でしたが、何年かやっていくうちに先ほどの「ちょっとおかしい学校運動部」に気づきはじめ、「“次の一歩”を踏み出す」ことになるわけです。「チームだけでなくクラブを育てる」「クラブが集まりアソシエーション、リーグを育てる」「同志による異業種ネットワークを育てる」ということです。今日の話は、2番目がメインです。

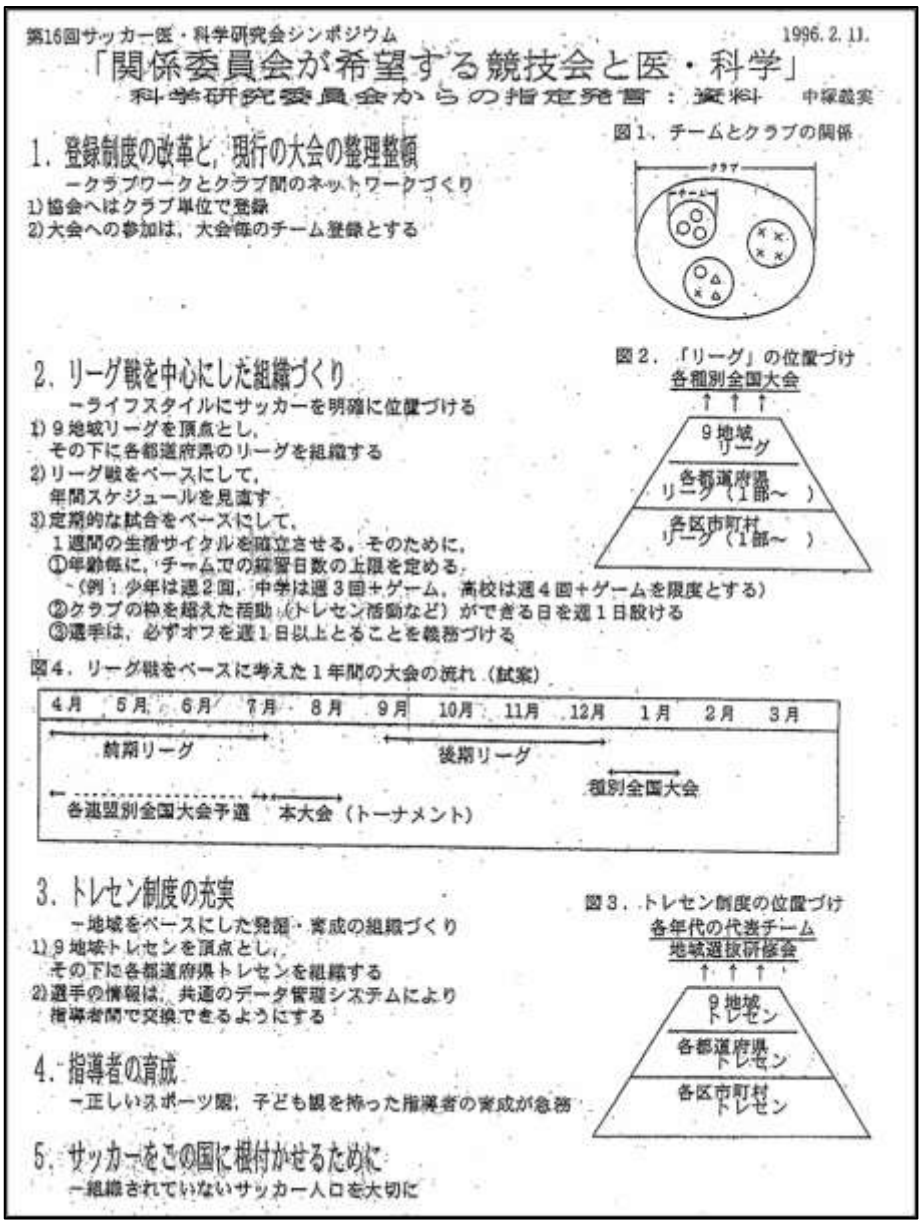
皆さんのお手許に年表があります。字が小さくて見にくいと思いますが、振り返りで活用してください。

1990年代に入ったころから、周囲の環境も変わってきました。年表の左列に赤字で書いたことが、私が深く関わったところです。Jリーグ発足の前の年に、東京都高体連サッカー科学研究会をはじめました。私はその会の取りまとめ役でした。翌96年にDUOリーグ発足、その翌年の97年に、今日のシンポジウムを主催するサロン2002が始まります。だからサロン2002も30周年になるんです。

◆サッカー医・科学研究会で構想発表（1996年2月）

その頃のユースサッカー環境は、テレビが取り上げてくれるお正月の高校選手権、8月のインターハイ、6月アタマの関東大会の3つが高体連主催の大きな大会で、そこに向けての予選が、負ければ終わりのノックアウト方式でありました。1回戦で全部負けると公式戦は3試合だけです。もっと言うと、

高1のころは補欠で出られず、3年生が「引退」と言っていなくなったころにようやく出られるようになり、3年生になると自分自身が「引退」と言ってやめてしまいます。だから実質的に試合に出るのは高校2年次のみです。これはおかしいということで、レベル別のリーグを、学校の1学期と2学期にやり、合間にカップ戦をする。リーグ期間がシーズンになるので、シーズンが明確になり、オフシーズン、プレシーズンも生まれる。こういうことを構想したわけです。

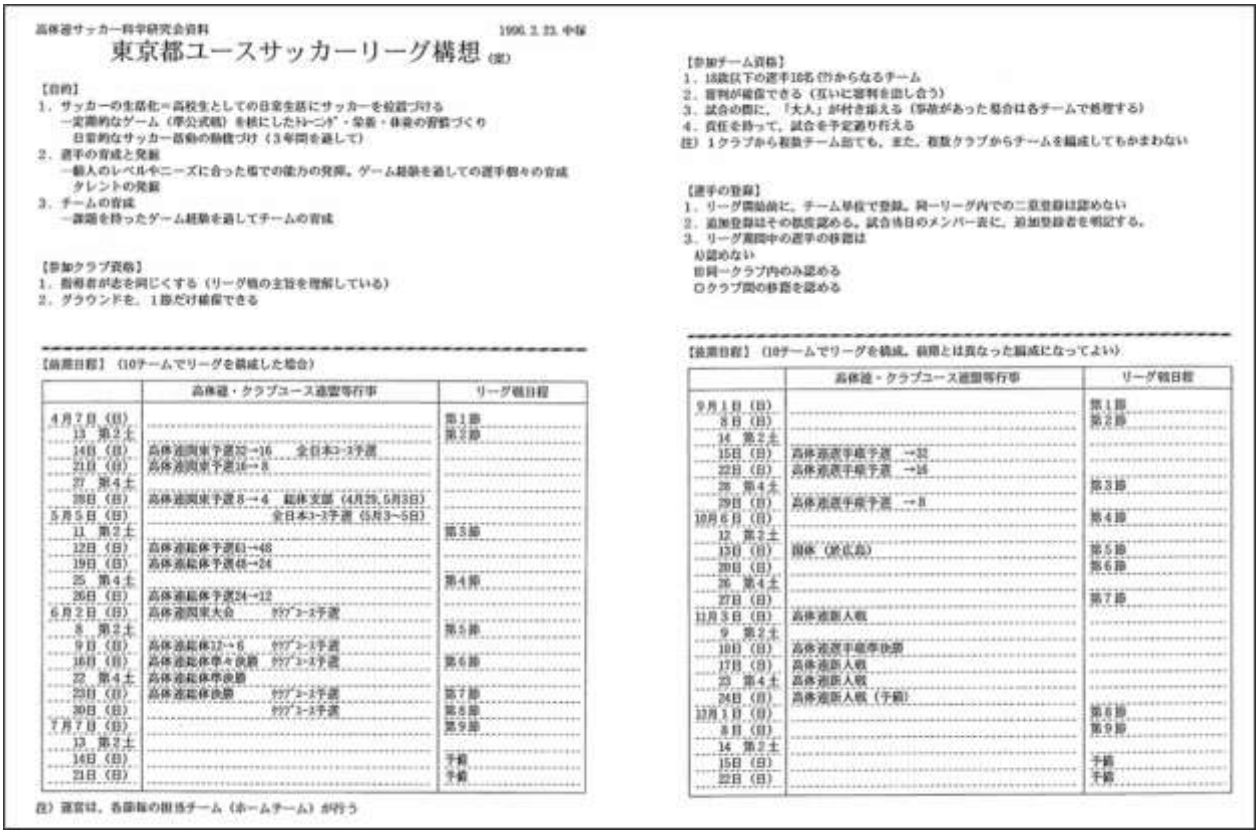


最初に構想を世に示したのが、1996年2月11日のサッカー医・科学研究会でした。私はJFAの科学研究委員として関わっていたのですが、「関係委員会が希望する競技会と医・科学」というシンポジウムで10分間、指定発言者としてプレゼンさせてもらう機会があり、その時考えていたことをまとめました。そのときの構想に「リーグ戦を中心にした組織づくり」があります。

資料をみてもらえばわかりますが、「リーグ戦」の前に「クラブを育てる」ことが念頭にありました。リーグ戦を通してクラブを育てるということです。

熱心な先生の異動でなくなってしまうような、学校に依存する部活ではなく、地域や卒業生など、学校ごとに担い手はいろいろあっていいんですけど、とにかく100年続くクラブを、リーグ戦を通してしっかり作っていこうということを考えて提案したものです。

2月23日付の資料があります。先ほども言った東京都高体連サッカー科学研究会で「東京都ユースサッカーリーグ構想」として参加者に説明したものです。1学期と2学期で、リーグ戦のために何週とれるのかを考え、具体化したものです。この時点ではどこのクラブが加盟するかは決まっていません。おそらくこの頃、猛烈な勢いでいろんなところに話をして回っていたと思います。



高体連サッカー科学研究会資料　1996. 3. 23. 中塚

東京都ユースサッカーリーグ構想（案）

【目的】
1．サッカーの生活化＝高校生としての日常生活にサッカーを位置づける
　一定期的なゲーム（準公式戦）を核にしたﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ・栄養・休養の習慣づくり
　日常的なサッカー活動の動機づけ（3年間を通して）
2．選手の育成と発展
　一個人のレベルやニーズに合った場での能力の発揮。ゲーム経験を通しての選手個々の育成
　タレントの発掘
3．チームの育成
　一課題を持ったゲーム経験を通してチームの育成

【参加クラブ資格】
1．指導者が志を同じくする（リーグ戦の主旨を理解している）
2．グラウンドを、1箇だけ確保できる

【参加チーム資格】
1．18歳以下の選手16名（)からなるチーム
2．審判が確保できる（互いに審判を出し合う）
3．試合の際に、「大人」が付き添える（事故があった場合は各チームで処理する）
4．責任を持って、試合を予定通り行える
注）1クラブから複数チーム出ても、また、複数クラブからチームを編成してもかまわない

【選手の登録】
1．リーグ開始前に、チーム単位で登録。同一リーグ内での二重登録は認めない
2．追加登録はその都度認める。試合当日のメンバー表に、追加登録者を明記する。
3．リーグ期間中の選手の移籍は
　△認めない
　○同一クラブ内のみ認める
　□クラブ間の移籍を認める

【前期日程】（10チームでリーグを構成した場合）

	高体連・クラブユース連盟等行事	リーグ戦日程
4月7日（日）		
13　第2土		第1節
14日（日）		第2節
21日（日）	高体連関東予選32→16　全日本ｽﾄﾞ予選	
27　第4土	高体連関東予選16→8	
28日（日）		
5月5日（日）	高体連関東予選8→4　総体支部（4月29、5月3日）	
11　第2土	全日本ｽﾄﾞ予選（5月3～5日）	第3節
12日（日）	高体連総体予選61→48	
19日（日）	高体連総体予選48→24	
25　第4土		第4節
26日（日）	高体連総体予選24→12	
6月2日（日）	高体連関東大会　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	
8　第2土		第5節
9日（日）	高体連総体12→6　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	
16日（日）	高体連総体準々決勝　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	第6節
22　第4土	高体連総体準決勝	
23日（日）	高体連総体決勝　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	第7節
30日（日）	ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	第8節
7月7日（日）		第9節
13　第2土		
14日（日）		予備
21日（日）		予備

注）運営は、各節毎の担当チーム（ホームチーム）が行う

【後期日程】（10チームでリーグを構成。前期とは異なった編成になってよい）

	高体連・クラブユース連盟等行事	リーグ戦日程
9月1日（日）		第1節
8日（日）		第2節
14　第2土		
15日（日）	高体連選手権予選　→32	
22日（日）	高体連選手権予選　→16	
28　第4土		第3節
29日（日）	高体連選手権予選　→8	
10月6日（日）		第4節
12　第2土		
13日（日）	国体（於仙台）	第5節
20日（日）		第6節
26　第4土		
27日（日）		第7節
11月3日（日）	高体連新人戦	
9　第2土		
10日（日）	高体連選手権準決勝	
17日（日）	高体連新人戦	
23　第4土	高体連新人戦	
24日（日）	高体連新人戦（予備）	
12月1日（日）		第8節
8日（日）		第9節
14　第2土		
15日（日）		予備
22日（日）		予備



東京都ユースサッカーリーグ計画（案）

1996. 3. 23.

【目的】
1．サッカーの生活化＝高校生としての日常生活にサッカーを位置づける
　一定期的なゲーム（準公式戦）を核にしたﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ・栄養・休養の習慣づくり
　日常的なサッカー活動の動機づけ（プランクを作らない。3年間活動できるように）
2．選手の育成と発展
　一個人のレベルやニーズに合った場での能力の発揮。ゲーム経験を通しての選手個々の育成
　タレントの発掘
3．チームの育成、クラブの育成
　一課題を持ったゲーム経験を通してチームの育成。各クラブの総合力の向上
4．サッカー環境の整備
　一審判の育成

【参加クラブ資格】
1．指導者が志を同じくする（リーグ戦の主旨を理解している）
2．試合会場を、1箇だけ主催できる
　（注：確保でき、かつ主催できることが望ましいが、お互いのやりくりで、主催だけでも可。
　　また状況によっては、複数会場で同時進行ということもあり得る）

【参加チーム資格】
1．原則として18歳以下の選手によって構成される
2．審判が確保できる（互いに審判を出し合う）
3．試合の際に、「大人」が付き添える（事故があった場合は各チームで処理する）
4．責任を持って、試合を予定通り行える
注）1クラブから複数チーム出ても、また、複数クラブからチームを編成してもかまわない

【選手の登録】
1．リーグ開始前に、チーム単位で登録。同一リーグ内での二重登録は認めない
2．追加登録はその都度認める。試合当日のメンバー表に、追加登録者を明記する。
3．リーグ期間中の選手の移籍は
　△認めない
　○同一クラブ内のみ認める
　□クラブ間の移籍を認める

【大会規定】
1．10チームの総当たりリーグ戦
2．最終順位の決定は、以下の順に従って行い、それでも決しない場合は同順位とする
　1）勝ち点　…勝3，分1，負0
　2）得失点差…総得点－総失点
　3）総得点数
　4）該当チームの直接対戦の結果

【競技規則】
・30分ハーフ、同点の場合は引き分け
・選手交代は自由（一度外に出ても再度出場できる）
・上記以外は公式ルール

【キックオフ】
第1試合　10:00
第2試合　11:20
第3試合　12:40
第4試合　14:00
第5試合　15:20

【前期日程】

	高体連・クラブユース連盟等行事	リーグ戦日程
4月7日（日）		
13　第2土		第1節
14日（日）		第2節
21日（日）	高体連関東予選32→16　全日本ｽﾄﾞ予選	
27　第4土	高体連関東予選16→8	
28日（日）		
5月5日（日）	高体連関東予選8→4　総体支部（4月29、5月3日）	
11　第2土	全日本ｽﾄﾞ予選（5月3～5日）	第3節
12日（日）	高体連総体予選61→48	
19日（日）	高体連総体予選48→24	
25　第4土		第4節
26日（日）	高体連総体予選24→12	
6月2日（日）	高体連関東大会　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	
8　第2土		第5節
9日（日）	高体連総体12→6　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	
16日（日）	高体連総体準々決勝　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	第6節
22　第4土	高体連総体準決勝	
23日（日）	高体連総体決勝　ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	第7節
30日（日）	ｸﾗﾌﾞﾕｰｽ予選	第8節
7月7日（日）		第9節
13　第2土		
14日（日）		予備
21日（日）		予備

注）運営は、各節毎の担当チーム（ホームチーム）が行う

【組み合わせ】

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
2	①		③	⑩	②	⑥	⑤	⑨	⑦	⑩
3	②	③		①	⑧	⑨	④	⑤	⑥	⑦
4	③	④	①		⑦	⑧	⑨	⑥	⑤	⑩
5	④	②	⑤	⑦		①	⑧	⑩	③	⑥
6	⑤	⑥	⑨	⑥	①		⑦	③	②	④
7	⑥	⑤	④	②	⑨	⑦		①	⑩	③
8	⑦	⑨	⑥	⑤	⑩	④	①		④	②
9	⑧	⑦	⑩	⑨	③	②	⑩	④		①
10	⑨	⑧	⑦	⑩	⑥	③	②	①		

第①節　1-2　3-4　5-9　7-8　9-10
第②節　1-3　2-5　4-7　6-9　8-10
第③節　1-4　2-3　5-9　6-8　7-10
第④節　1-5　3-4　2-7　8-9　6-10
第⑤節　1-6　2-7　3-8　4-9　5-10
第⑥節　1-7　2-6　3-9　5-8　4-10
第⑦節　1-8　2-9　4-5　6-7　3-10
第⑧節　1-9　2-8　4-6　5-7　3-10
第⑨節　1-10　2-8　3-5　4-6　7-9

（チームの割り振り）
1. 城北A　2. 城北C
3. 小石川A　4. 南B
5. 小石川B　6. 三田
7. 南北A　8. 京極
9. 城北B　10. 筑波B

3月23日付の資料は「計画」となっていてチーム名も入り、スケジュールも手書きで書き込まれています。

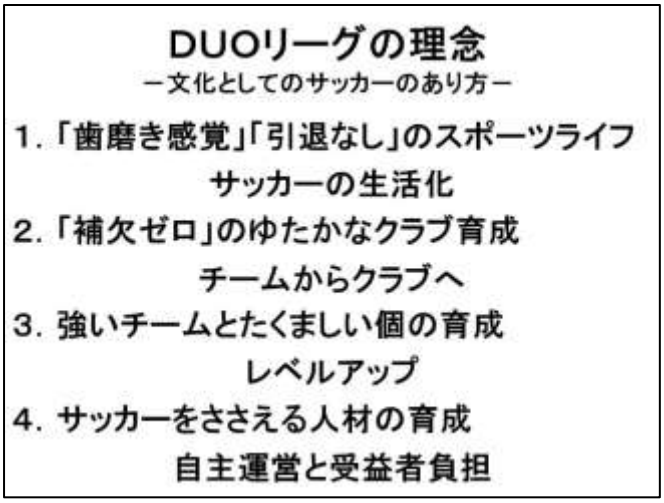
◆DUOリーグ初年度（1996年度）

4月7日が第1節です。文京区と豊島区の学校運動部とクラブユースでリーグ戦が始まりました。

高体連第2地区の仲間です。いろんなところでしょっちゅう顔を合わせていた人たちなので、構想段階からいろんな話をしたと思います。どうしてもリーグ加盟してほしかったのは、上野先生がおられる都立小石川高校でした。当時、上野先生は東京都高体連サッカー専門部長をされていました。東京の部長は次の全国部長になる流れだったので、上野さんにリーグ戦を経験してもらえれば、絶対にこの動きを全国展開できると考え、上野さんに話をしに行った覚えがあります。

大事なのは“理念”をしっかり掲げ、それに賛同するクラブがリーグ加盟するということです。試合ができるというだけではありません。「サッカーの生活化」をもっとわかりやすくするために「歯磨き感覚」「引退なし」、あるいは「補欠ゼロ」といったキーワードを用いて“理念”を表しました。“理念”をともに実現しようとする人たちでやるんだよということです。

情報共有は重要で、「通信」の発行にはこだわりました。初期の通信はA4判1枚もので、FAXで全クラブに送信しました。


DUOリーグの理念
－文化としてのサッカーのあり方－
1.「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ
サッカーの生活化
2.「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成
チームからクラブへ
3. 強いチームとたくましい個の育成
レベルアップ
4. サッカーをささえる人材の育成
自主運営と受益者負担


DUOリーグ通信

リーグ戦第１節記録　1996.4.1.
日時：１９９６（平成８）年４月７日（日）　天候：くもりのち晴れ
会場：筑波大学附属高校特設グラウンド（縦75m×横61m）

第１試合（10:00～：主審―中塚，副審…筑波）
小石川A　2－1（2-0,0-1）向丘
得点者：小石川A―大塚，飯木
向　丘…ｵｳｳﾞｪﾝ
第２試合（11:20～：主審―上野，副審…小石川）
筑波A　3－2（0-0,3-2）昭和C
得点者：筑波A―田上，川口，上田（希）
昭和C―榎本(2)
第３試合（12:40～：主審―青木，副審―昭和）
小石川B　1－1（0-0,1-1）三菱養和
得点者：小石川B―加藤
三菱養和―高沢
第４試合（14:00～：主審…野原，副審―養和）
昭和A　0－3（0-1,0-2）京華
得点者：京華…出川(2)，横沢
第５試合（15:20～：主審…小金丸，副審…京華）
昭和B　3－1（2-0,1-1）筑波B
得点者：昭和B…上田，高田，秦
筑波B…大河原

<順位（第１節終了時）>
1．京　華　勝ち点３　得失点差＋３　総得点３
2．昭和B　勝ち点３　得失点差＋２　総得点３
3．筑波A　勝ち点３　得失点差＋１　総得点３
4．小石川A　勝ち点３　得失点差＋１　総得点２
5．小石川B　勝ち点１　得失点差±０　総得点１
5．三菱養和　勝ち点１　得失点差±０　総得点１
7．昭和C　勝ち点０　得失点差－１　総得点２
8．向　丘　勝ち点０　得失点差－１　総得点１
9．筑波B　勝ち点０　得失点差－２　総得点１
10．昭和A　勝ち点０　得失点差－３　総得点０

<得点ランキング（第１節終了時）>
1．榎本（昭和C）　2点
1．出川（京華）　2点
3．大塚（小石川A）　1点
3．飯木（小石川A）　1点
3．田上（筑波A）　1点
3．川口（筑波A）　1点
3．上田（希）（筑波A）　1点
3．加藤（小石川B）　1点
3．高沢（三菱養和）　1点
3．横沢（京華）　1点
3．上田（昭和B）　1点
3．高田（昭和B）　1点
3．秦（昭和B）　1点
3．大河原（筑波B）　1点

第２節の予定

<筑波会場>　（審判）
10:00　筑波A　VS　向丘　（昭和）
11:20　筑波B　VS　昭和A　（向丘）

<小石川会場>　（審判）
13:00　小石川A　VS　昭和C　（養和）
14:20　小石川B　VS　昭和B　（京華）
15:40　京　華　VS　三菱養和　（小石川）

注：最初の計画では第３節に予定されていた組み合わせですが，会場の都合でこのようにしました．終了後，今後の進め方，リーグの名称の検討を兼ねて，懇親会を懇親昼間にて実施したいと思いますがいかがでしょうか？

DUOリーグ第２節記録　1996.4.15.
日時：１９９６（平成８）年４月13日（土）　天候：晴れ
会場：筑波大学附属高校特設グラウンド（縦75m×横61m），小石川高校グラウンド

筑波会場：第１試合（10:00～：主審―青木，副審―昭和A）
筑波A　3－1（2-1,1-0）向丘
得点者：筑波A―岡崎(2)，徳原
向　丘―中井
筑波会場：第２試合（11:20～：主審―黒原，副審―向丘）
筑波B　0－2（0-0,0-2）昭和A
得点者：昭和A―細野(2)
小石川会場：第１試合（12:00～：主審―野原，副審―三菱養和）
小石川A　1－2（1-1,0-1）昭和C
得点者：小石川A…木村野
昭和C…長尾，榎本
小石川会場：第２試合（14:20～：主審…小金丸，副審…京華）
小石川B　1－1（0-1,1-0）昭和B
得点者：小石川B…朱
昭和B…岩崎
小石川会場：第３試合（15:40～：主審…上野，副審…小石川）
京　華　3－2（1-0,2-2）三菱養和
得点者：京　華…谷本，村松，横沢
筑波B…竹中(2)

<順位（第２節終了時）>
1位．京　華　勝ち点６　得失点差＋４　総得点６
2位．筑波A　勝ち点６　得失点差＋３　総得点６
3位．昭和B　勝ち点４　得失点差＋２　総得点４
4位．昭和C　勝ち点３　得失点差＋０　総得点４
5位．小石川A　勝ち点３　得失点差±０　総得点３
6位．昭和A　勝ち点３　得失点差－１　総得点２
7位．小石川B　勝ち点２　得失点差±０　総得点２
8位．三菱養和　勝ち点１　得失点差－１　総得点３
9位．向　丘　勝ち点０　得失点差－３　総得点２
10位．筑波B　勝ち点０　得失点差－４　総得点１

<得点ランキング（第２節終了時）>
1位．榎本（昭和C）　3点
2位．出川（京華）　2点
2位．横沢（京華）　2点
2位．岡崎（筑波A）　2点
2位．細野（昭和A）　2点
3位．竹中（三菱養和）　2点
3位．１得点者18名

注）１得点者18名は以下のとおり
谷本・村松（京華），上田（希）・田上・川口・徳原（筑波A），上田・高田・秦（昭和B），長尾（昭和C），大塚・飯木・木村野（小石川A），加藤・朱（小石川B），高沢（三菱養和），中井（向丘），大河原（筑波B）

<リーグ戦情報>
1．本リーグの名称を検討していた指導者委員会(?)が，第２節終了後，事務局施設内で行われ，「ＤＵＯ(ﾃﾞｭｵ)リーグ」に決定しました．
2．同委員会に出席されていたｻｯｶｰｼｮｯﾌﾟ加茂の平塚氏より，本リーグのスポンサーに個人的に就任される希望があり，全会一致で承認されました．優勝チーム及び得点王には豪華賞品(?)が提供される可能性があります
3．第３節の予定は後日連絡いたします．連休中に行う可能性も検討しておりますので，ご意見がありましたらご連絡下さい　（文責：中塚）

学校のFAXが進化したおかげで、宛先を入力すれば1枚の通信がすべての宛先に送れるようになり、とても簡単にできるようになりました。これがなかったらハガキや郵便で送るしかなかったわけですから。

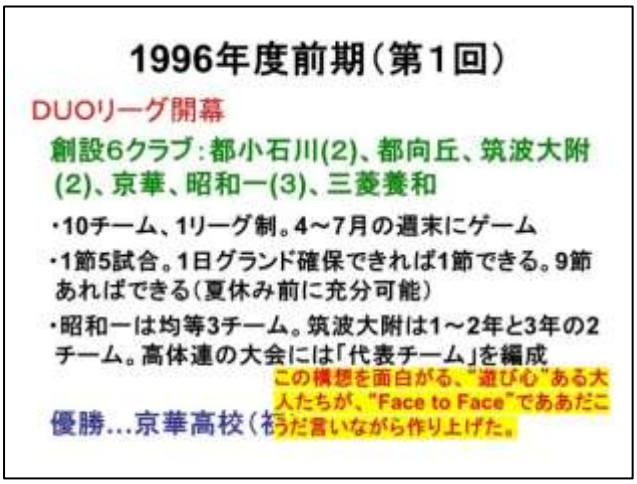
第1節ではリーグ名がありませんでしたが、第2節の通信で「DUOリーグ」と書かれています。

1節5試合を1日でやり、終わったら指導者が居酒屋に集まり、ああでもないこうでもないと話をしていました、そんな中で、「第2地区で始まったんだから、2をかっこよく言ってリーグ名にしよう」ということになり、上野さんが「DUO」を提案して決まったと通信に書かれています。

1996年度前期は、創設6クラブから10チーム。昭和一からは3チーム、筑波大附からは2チーム出ています。筑波Aは3年生、筑波Bは1，2年生チームで、「高体連の公式戦にはAとBの連合軍がナショナルチームを編成して出る」と言っていました。一番盛り上がったのはA対Bのダービーマッチ。優勝は京華高校です。

この京華高校の中心選手が、いま昭和第一高校の顧問で今年からチェアマンになられた永井直樹さんです。

DUOリーグ会議には、途中から高校生も参加するようになりましたが、初年度の立ち上げ時に高校生は関わっていません。“遊び心”ある大人たちが、“Face to Face”であああだこうだ言いながら作り上げました。





1学期の前期リーグがすごく良かったので、2学期に後期リーグをやろうということになりました。ここから学習院も加盟します。第2部でご登壇いただく瀬田さんは、高校1年生で後期リーグから参加します。

いまは入っていないけど、文京区中学生選抜も後期から加盟しました。郁文館中学の丸山先生が取りまとめておられました。中学3年生も2学期になると「引退」と言ってやめてしまい、やることがなくなります。それはもったいないということで、後期リーグだけ参加することにしたものです。

筑波大附属と京華はその当時、毎週木曜日に合同練習していたので、合同チームを作ってリーグに参加します。また1996年はアトランタ五輪でオーバーエイジが採用され、「これ使える」ということで、各チーム3名までオーバーエイジありとしました。これによって、私も出場できるようになりました。またこういったことを長く続けるためには、働いた人にささやかでもペイしようと考えました。例えば審判をしてくれた高校生には一人1試合500円の審判費を払おうと。そのためには受益者負担です。大会参加費を1チーム15,000円徴収することを後期から始めました。これについてはおもしろいエピソードがあるけど、今日は省略です。

◆リーグ戦の広がりとさまざまな取り組み

いかに続け、広げていくかを考え、実行していきました。東京都高体連サッカー科学研究会で「リーグ戦を始めたよ」という話をしたところ、第6地区で、世田谷区と町田市の頭文字をとって「SMリ

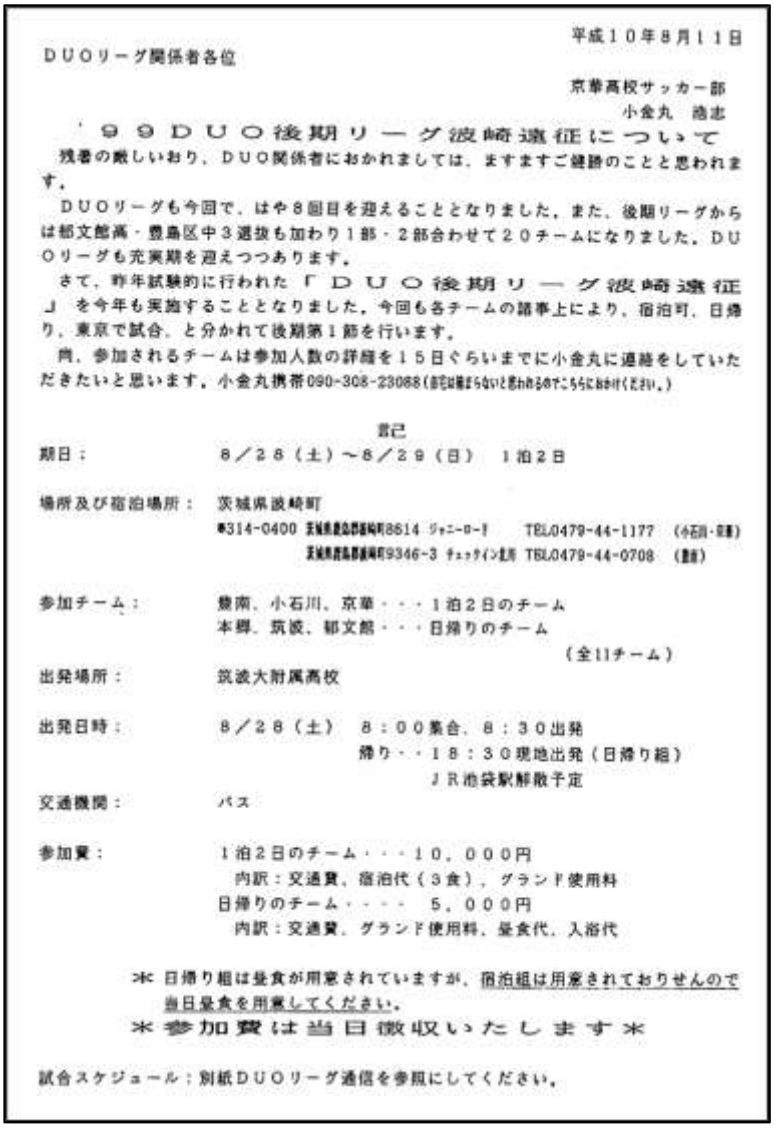
ーグ」がはじまりました。筑波大附属駒場におられた小澤治夫さんや、今年からJFA技術委員会の副委員長になられた成城学園の蔵森紀昭さんが中心です。

JFAの機関紙に「ユース年代のサッカーはいま！」という連載を持つこともでき、そこでも紹介しました。またJFAの指導者養成講習会でスポーツ社会学の授業を担当し、授業の中でも紹介しました。今日の参加者に水上博司さんがおられますが、一緒にその講座を担当していた方です。

底辺から積み上げたリーグ構想をトップまでつなげる動きも始めました。JFAでもキャプテンズミッションの一つに掲げるようになり、私もプロジェクトメンバーの一人でした。

底辺は近場で、レベルの高い人たちは広い範囲を行き来してリーグ編成するイメージです。「ユース年代の生活圏を考えると全国リーグは不要」と考えていましたが、いまでは東日本と西日本に分かれてプレミアリーグをやっています。

後期第1節は、大型バスを数台チャーターし、茨城県神栖市波崎の天然芝で行うことも数年やりました。いろんな学校の生徒がバスに乗っているので「バスレク」もします。レクリエーションじゃなくて「バスレクチャー」です。DUOリーグとは何かという話を、高校生に直接伝える機会でした。



平成１０年８月１１日

ＤＵＯリーグ関係者各位

京華高校サッカー部
小金丸　浩志

'９９ＤＵＯ後期リーグ波崎遠征について

残暑の厳しいおり、ＤＵＯ関係者におかれましては、ますますご健勝のことと思われます。

ＤＵＯリーグも今回で、はや８回目を迎えることとなりました。また、後期リーグからは郁文館高・豊島区中３選抜も加わり１部・２部合わせて２０チームになりました。ＤＵＯリーグも充実期を迎えつつあります。

さて、昨年試験的に行われた「ＤＵＯ後期リーグ波崎遠征」を今年も実施することとなりました。今回も各チームの諸事上により、宿泊可、日帰り、東京で試合、と分かれて後期第１節を行います。

尚、参加されるチームは参加人数の詳細を１５日ぐらいまでに小金丸に連絡をしていただきたいと思います。小金丸携帯090-308-23088（都合は悪くないと思われるのでこちらにお掛けください。）

記

期日：　８／２８（土）～８／２９（日）　１泊２日

場所及び宿泊場所：　茨城県波崎町
〒314-0400 茨城県鹿島郡波崎町8814 ジョニーロード　TEL0479-44-1177（小石川・京華）
茨城県鹿島郡波崎町9346-3 チェックイン波崎 TEL0479-44-0708（筑波）

参加チーム：　駿南、小石川、京華・・・１泊２日のチーム
本郷、筑波、郁文館・・・日帰りのチーム
（全11チーム）

出発場所：　筑波大附属高校

出発日時：　８／２８（土）　８：００集合、８：３０出発
帰り・・１８：３０現地出発（日帰り組）
ＪＲ池袋駅解散予定

交通機関：　バス

参加費：　１泊２日のチーム・・・１０，０００円
内訳：交通費、宿泊代（３食）、グランド使用料
日帰りのチーム・・・・　５，０００円
内訳：交通費、グランド使用料、昼食代、入浴代

＊日帰り組は昼食が用意されていますが、宿泊組は用意されておりせんので当日昼食を用意してください。
＊参加費は当日徴収いたします＊

試合スケジュール：別紙ＤＵＯリーグ通信を参照にしてください。

◆その頃のDUOリーグー通信とプログラムより

DUOリーグ通信はかなりの頻度で発行しました。試合結果を共有するだけでなく、チェアマンからのメッセージをたびたび載せていました。各クラブ代表者宛にFAXで送ります。部員にもちゃんと伝えてくれよと言っていましたが、どこまで伝わっていたのかはわかりません。池袋のサッカーショップ加茂にも送り、掲示してもらっていました。

メッセージには苦言が増えてきます。「プロ意識を持ったボランティアたれ（2000年10月18日）」は、忙しいなどと言い訳せず、やるべきことをしっかりやれということです。大人に対して言っています。

「チェアマンからの厳重注意（2000年6月6日）」は、筑波大附属高校グラウンドで試合をやったあとで、体育館の女子バレーをのぞきに来た他校のサッカー部員の話です。土足で体育館に上がるというおまけつきで、バレー部の先生にこっぴどく怒られています。

日常的にはこんな話ばかりです、けど、自分の学校の生徒か否かに関わらず、リーグで起きたことはリーグ全体で共有し、少しでも良くしていこうという思いでした。

2000年6月6日の通信にはもう一つ、「東京都ユースサッカーリーグ設立趣意書提出」の記事もあります。オフィシャル化の動きについてのニュースです。

ちょうど2000年度からDUOリーグのプログラムをつくるようになりました。我々のリーグが何を目指し、どんな人が関わっているのかを知ってもらうものです。プログラムは全てのDUOリーガーに配布しました。

2000年度後期プログラムの開幕挨拶には「2001年度に東京都ユースサッカーリーグを創設すべく、行動を開始する」と書かれています。この年のスローガンです。

そして2001年度前期リーグ開幕挨拶には、3つのことが書かれています。

1．東京都ユースリーグを早期に実現すべく行動を継続する
2．DUOリーグ“IT革命”元年とする
3．“FCDUO”構想の可能性を検討する

DUO リーグ通信 2000-17（2000 年 10 月 18 日）

チェアマンより－「プロ意識を持ったボランティア」たれ！

ＤＵＯリーグの試合日程は、各期はじめに各クラブ代表者から提出される日程表をもとにして競技担当が編成し、広報担当が通信等で連絡することになっています。先週末のゲームは「通信」で連絡した後、試合前日になって実施できない試合があることが判明し、急遽電話連絡で訂正することとなりました。各期はじめに各クラブの代表者から提出された日程表をもとにして作成しているはずなのに、なぜそういうことになるのでしょう？

もう一つ。後期リーグ戦プログラムが、後期リーグも半分を経過した今ごろになってようやく印刷屋に入稿されました。８月から準備していたはずなのに、なぜこのような事態に陥るのでしょう？

ＤＵＯリーグを運営するために、競技・広報の他に会計担当を置き、登録費・参加費の徴収と配分(審判手当ての支給等)を行っています。プログラム、審判講習会、フレッシュマンリーグ、ＤＵＯリーグ選抜についても担当を決め、進めていくことになっています。このように業務を分担することはリーグの発展にともなう必然的な運営形態であり、各担当が責任を持って取り組むことで、リーグは一つのシステムとして機能するのです。

各担当は皆、他に本業を持っており、「ボランティア」としてこれらの仕事に取り組んでいます。本業を全うしながら「ささえる」仕事に取り組んでいる人がいることをまずはご理解下さい。

その上で、「ささえる」人々に敢えて苦言を呈します。

本業が「忙しい」ことを理由にするのは無責任な「甘チュア」の戯言です。「ボランティア」だからこそ、仕事は手分けして協力して行い、与えられた仕事には責任を持って、「プロ意識」を持って取り組まねばなりません。そうでなければ、ボランティアベースの活動が続くはずがありません。「忙しい」のは誰でも同じです。それを「忙しい」と取らず、「充実している」と前向きに考え、「プロ意識を持ったボランティア」として気持ちよく取り組んで下さい。必ず「ささえる喜び」が得られるはずです。

さらに、担当者以外のクラブ代表者に苦言を呈します。皆でＤＵＯリーグをささえているのだということを今一度ご確認下さい。原稿の提出が遅れたらプログラムは作れません。各クラブの日程表が中途半端なものだったらＤＵＯの日程は作れません。参加費が振り込まれなければ、運営できません。まだ過去の参加費を滞納しているクラブがあります…。

過ぎたことの非を問うのはやめましょう。それよりも、今一度、全員がリーグ運営の当事者としての意識をもって、後期リーグ後半戦に臨んでいただきたいと思います。

DUO リーグ通信 2000-6（2000 年 6 月 6 日）

チェアマンからの厳重注意！

DUO リーグの理念とその活動を今後も継続し、広げていくためには多くの方の理解が必要です。特に施設の利用に関して、学校関係者の理解は不可欠です。「立入禁止」「ボール使用禁止」「スパイク禁止」「更衣・トイレは指定された場所を使用する」「ゴミは持ち帰る」など、各会場ごとの約束事を守らないと、DUO リーグそのものの運営ができなくなります。

6 月 4 日の筑波会場では，体育館で女子バレーボールの練習試合が行われていました。DUO の試合を終えたある「DUO リーガー」が、バレーボールを見ようと正面玄関から体育館内に入りました。土足のままで…。5 月にも同じことがありました…。体育館の管理をされている先生からは、「これはもう個人の問題じゃないよ。こんなんじゃあサッカーで学校を使ってほしくないよ！」とまで言われています。

体育館に入る場合、入り口で靴を履きかえる。子供でも知っている常識です。にもかかわらず、土足で上がってしまった行為は、もはや一個人が叱られ、反省して終わるという性質のものではありません。「DUO リーガー」が行った行為は DUO リーグ全体の問題です。もっというなら、ただでさえマナーが悪いと思われているサッカー界全体の問題です。同じ日の同じ会場で、更衣場所となっている前庭で遊びながら校舎に向かってボールを蹴っていた「DUO リーガー」が中塚にこっぴどく叱られたのも同じ理由です。

いま一度、施設を利用するとはどういうことなのか、一人ひとりがよく考えて下さい。学校だからどうこう言うのではありません。公営・民営問わず、施設を借りる場合に「使い方を守る」のは常識です。できない人(人たち)がいるようでしたら、その人(その人たち)を排除するか、もしくは活動そのものを中止するしかありません。サッカー界がその程度だとしたら、全く情ない話です。

そんなことにならないよう、DUO リーガーとしての自覚を持って行動して下さい。行動できない人がいた場合は互いに注意しあって下さい。他のクラブでもかまいません。同じ DUO の仲間なのです。「管理する人とされる人」という次元の低い構造に寄りかかることなく、一人ひとりが「DUO リーグの当事者」として行動して下さい。

２は、これまでFAXで送っていた通信をEメールで送るようにすることと、ホームページを作ることです。３は、DUOリーグで高校生は各クラブに分かれて試合をしているけど、卒業したらFCDUOを作って活動し、最終的にはJリーグを目指すようなことを検討しようという話です。

こういうことを考えながらいろいろやっていると、メディアも注目してくれるようになります

2001年6月23日の日本経済新聞や、2002年3月30日の読売新聞の全国版で大きく取り上げてもらいました。月刊『サッカークリニック』の2003年5月号では「東京の真ん中でリーグ戦を主宰する新感覚のリーダー」として複数ページにわたって取り上げられました。ユース年代のリーグ戦はDUOリーグがパイオニアであり、その理念や実践が徐々に浸透していったのは確かです。

審判など、ささえる人材を育てるのはとても大事ですが、「最近ユース審判をめぐるトラブルが目につきます」ということを2002年10月8日の通信に書いています。

「無知や照れによる誠意を欠いた態度は、勉強不足、経験不足が原因と考えられます」と。プレイヤーもミスしますが、プレイヤーは普段から練習しています。ではDUOリーグで主審をする高校生は、普段から審判の練習をしてますかという話なんです。ちょっとした工夫でできるはずです。そこをもうちょっとやろうよということです。練習最後のミニゲームで笛を持たせることや、体育の授業や学校行事で審判をする場面などを活用してしっかりやろうと。

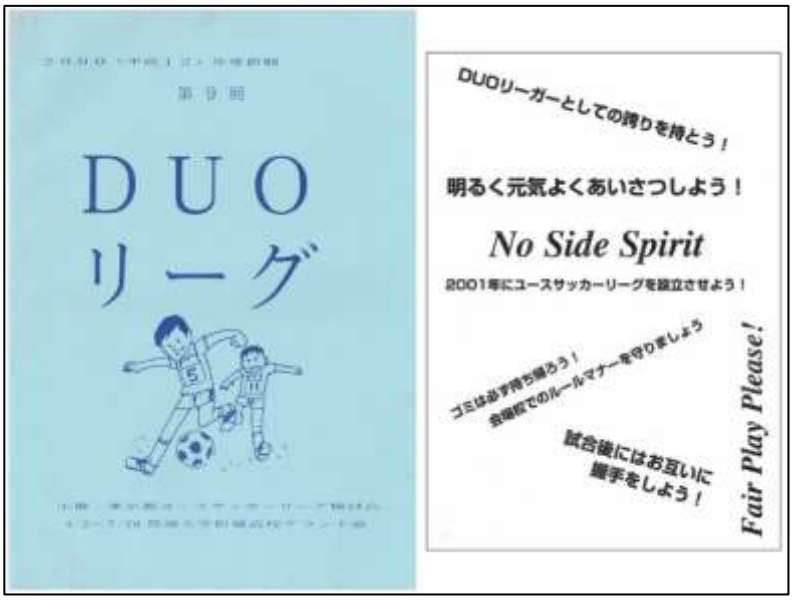
DUO リーグ通信 2000-6（2000 年 6 月 6 日）

東京都ユースサッカーリーグ設立趣意書提出！

「2001 年度より東京都ユースサッカーリーグを創設すべく行動を開始する」ことが本年度の DUO リーグの活動方針です。そのため、プログラムの作成を始めとする DUO リーグそのものの整備を進めると同時に、政策決定機関でありかつ実施主体ともなる(であろう)(財)東京都サッカー協会(TFA)へのはたらきかけも必要です。

(財)日本サッカー協会(JFA)第 2 種検討委員長でもある小石川高校の上野二三一先生が、この件で TFA 安田一男会長に設立趣意書(DUO 関係者には後日お送りします)を提出したのが 6 月 5 日(月)。8 日(木)の総務委員会での検討を経て 20 日(火)の理事会で承認されれば、TFA 第 2 種委員会においてユースサッカーリーグを検討する部署が設置され、具体化へ踏み出すことになるでしょう。なお、参考資料として DUO リーグプログラムを 30 部、TFA に寄贈しました。

DUO リーグの皆様はこの成り行きを「当事者」として見つめていただくとともに、DUO リーグが先行事例としてよいモデルとなるよう、さらに質を高め、些細なことにも改善に取り組んで下さい。特に、次に挙げるようなことについては各クラブ、そして個々が充分自覚して臨んで下さい。



DUO リーグ通信 2002-17（2002 年 10 月 8 日）

チェアマンより②－審判につい

ＤＵＯリーグでは「サッカーをささえる人材の育成」を理念の一つに掲げていることは十分ご承知のとおりです。審判の育成はその大きな柱であり、毎年２月には審判講習会を主催して有資格審判を育て、ＤＵＯの試合で高校生が笛を吹くことを奨励し、優秀審判の表彰制度を励みにしてもらっています（審判手当てもあります）。

しかしながら最近、ユース審判をめぐるトラブルが目につきます。「無知」や「照れ」による誠意を欠いた態度は、「勉強不足」「経験不足」が原因と考えられます。

プレーヤーもミスをします。しかし彼らは、普段からサッカーのプレーを練習してＤＵＯのゲームに臨んでいます。では審判はどうでしょう。いつもぶっつけ本番ではないでしょうか。普段の練習でどの程度審判のトレーニングが行われているでしょうか？

「普段からトレーニングできていないから顧問が笛を吹く」。これでは「ささえる人材」としての審判は育ちません。その意味で、いつも顧問が笛を吹いているところは「審判を育ててください」と言うしかありません。

小さなことでかまいません。練習の最後のミニゲームに、交代でもいいから一人笛を持たせてはどうでしょうか。体育の授業や学校行事（球技大会）などで審判の経験をすることももちろんですが、普段の練習の小さな工夫で審判も育てられると思います。試みてください。

と同時に、ＤＵＯの試合での高校生（卒業生も含む）審判を、周りの大人がしっかり見てアドバイスしてあげましょう。せめて自分のクラブの高校生が笛を吹いているときはピッチサイドで見てやってください。あるいは、他校の生徒であっても、そこで見ている大人がアドバイスしてあげればいいと思います。それがＤＵＯリーグの仲間です。

試合結果記録用紙には、審判の５段階評価の欄もあります。両チームの指導者がこの数字を本人に伝えながら、どこがよくてどこが不十分だったかをその場で伝え合うことが大切だと思います（なお、大人が笛を吹いた場合も５段階評価の対象となります）。

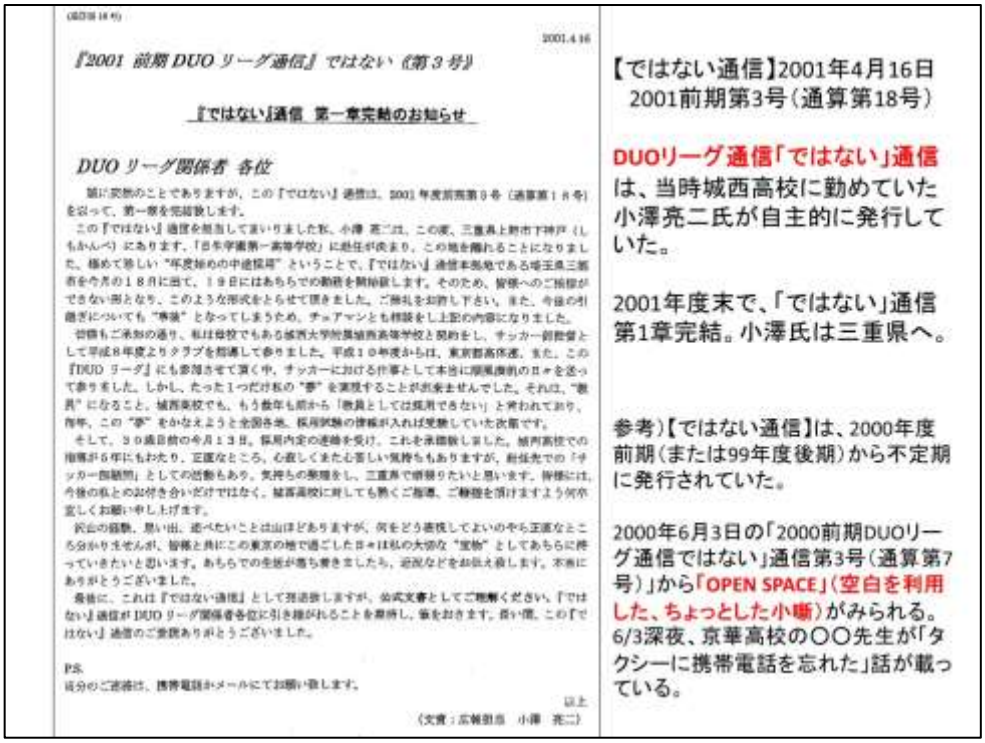
また、DUOの試合で笛を吹く高校生審判を、周りの大人もしっかり見てアドバイスしてあげましょうということも書いています。筑波大附の生徒が審判をするとき、私は必ずピッチを描いたA4判ぐらいの用紙を持ってクラブハウスの2階に上がり、審判をやっている生徒がどのように動いているかを、10分ぐらいですけど追って図示します。ハーフタイムにそれを見せてやると、「センターサークル周辺しか動いていない」とか「副審と挟み込んで見るんやぞ」ということを具体的に指導できます。ほんのちょっとのことだけど、これをやると後半はかなり変わります。そういうことを「皆さんやってますか？」ということなんです。



さらに言うと、この頃からDUOリーグの試合記録に審判の5段階評価を記入するようになったんですけど、なぜか学校の先生がやっているときはいつも評価5で、高校生がやると急に3点とかになるんです。センターサークルから出ないでドーンと構えるだけの先生が高得点。「できてないのにおかしいやないか」と。マンネリ化してるんじゃないかなと思いますね。

“ささえる”楽しみのスライドで、小柄なお兄さんが審判服を着ている写真があります。今日の登壇者の岸さんが高校生の時の写真です。

DUOリーグプログラムには、各校のマネージャーが連携して作るページもありました。プログラム作成を遊んでいたんです。


『2001 前期 DUO リーグ通信』ではない《第３号》

2001.4.16

『ではない』通信 第一章完結のお知らせ

DUO リーグ関係者 各位

皆様、ご無沙汰のことでありますが、この『ではない』通信は、2001 年度前期第３号（通算第１８号）を以って、第一章を完結致します。

この『ではない』通信を担当して参りました私、小澤 亮二は、この度、三重県上野市下神戸（しもかんべ）にあります、『日本学園第一高等学校』に赴任が決まり、この地を離れることになりました。極めて珍しい“年度始めの中途採用”ということで、『ではない』通信本拠地である埼玉県三郷市を今月の１８日に出て、１９日にはあちらでの勤務を開始致します。そのため、皆様へのご挨拶ができない形となり、このような形式をとらせて頂きました。ご無礼をお許し下さい。また、今後の引継ぎについても“事後”となってしまうため、チェアマンとも相談をし上記の内容になりました。

皆様もご承知の通り、私は母校でもある城西大学附属城西高等学校と契約をし、サッカー部部督として平成８年度よりクラブを指導して参りました。平成１０年度からは、東京都高体連、また、この『DUO リーグ』にも参加させて頂く中、サッカーに対する仕事として本当に限界度前のロマを追って参りました。しかし、たった１つだけ私の“夢”を実現することが出来ませんでした。それは、“教員”になること。城西高校でも、もう数年も前から「教員としては採用できない」と言われており、昨年、この“夢”をかなえようと全国各地、採用試験の情報が入れば受験していた次第です。

そして、３０歳目前の今月１３日、採用内定の連絡を受け、これを承諾致しました。城西高校での指導が６年にもわたり、正直なところ、心苦しくまた心苦しい気持ちもありますが、新任先での『サッカー指導部』としての活動もあり、気持ちの整理をし、二重県で頑張りたいと思います。皆様には、今後の私とのお付き合いだけではなく、城西高校に対しても熱くご指導、ご鞭撻を頂けますよう何卒宜しくお願い申し上げます。

紙面の関係、思い出、述べたいことは山ほどありますが、何をどう表現してよいのやら正直なところ分かり上せんが、皆様と共にこの東京の地で過ごした８ヶ年は私の大切な“宝物”としてあらちに持っていきたいと思います。あちらでの生活が落ち着きましたら、近況などをお伝え致します。本当にありがとうございました。

最後に、これは『ではない通信』として発行致しますが、公式文書としてご理解ください。『ではない』通信が DUO リーグ関係者各位に引き継がれることを期待し、筆をおきます。長い間、この『ではない』通信のご愛読ありがとうございました。

P.S.
私分のご連絡は、携帯電話かメールにてお願い致します。

以上

《文責：広報担当　小澤　亮二》

【ではない通信】2001年4月16日
2001前期第3号（通算第18号）

DUOリーグ通信「ではない」通信は、当時城西高校に勤めていた小澤亮二氏が自主的に発行していた。

2001年度末で、「ではない」通信第1章完結。小澤氏は三重県へ。

参考）【ではない通信】は、2000年度前期（または99年度後期）から不定期に発行されていた。

2000年6月3日の「2000前期DUOリーグ通信ではない」通信第3号（通算第7号）」から「OPEN SPACE」（空白を利用した、ちょっとした小噺）がみられる。6/3深夜、京華高校の○○先生が「タクシーに携帯電話を忘れた」話が載っている。

「ではない通信」というのもありました。DUOリーグ通信は私の方から定期的に発行するオフィシャル通信だけど、その合間を縫って、DUOリーグ通信「ではない通信」を勝手に始めてくれた方がいました。城西高校で当時コーチだった小澤亮二さんです。今日は三重県から来てくれました。あとでコメントをいただければと思います。

◆財務構造とSSFスポーツエイド

いろんなことをやっているとお金がかかります。ささえる活動にはペイしようと言っているのだから当然です。ではささえる活動に対して誰が払うのか。

試合実施に必要なお金は、リーグに参加するチーム単位で徴収します。1チーム 15,000円、いまは2万円かな。審判手当も、大きな額は出せないけど発生させています。



そのうちプログラムを作ろうということになりました。お金がかかります。当時、1冊作ると300円ちょっとかかりました。前後期あわせて一人600～700円です。これを機に、DUOリーガーから個人登録料を徴収することになりました。基本的にはプログラム代だけど、それに加えて、この後できるDUOリーグ保険への加入も、登録料を払ったプレーヤーが対象です。DUOリーガーをはっきりさせることになりました。

さらに、クラブごとに加盟費を徴収するようにしました。リーグに加盟するのはクラブです。例えば、今年は人数が少ないのでチームは出せないけど、DUOの理念には賛同するし関わりたいというように、DUOリーグの一員であり続けたいクラブには、通信等を配信し、情報でつながりを保つなどです。そのような考え方で財務構造を組み立てました。

ちなみに財務構造の図は、書いてあるとおり「出張サロンin神戸（HFAセミナー）」として、兵庫県サッカー協会に呼ばれて話をさせてもらったときのものです。今日はオンラインで参加されていますが、日本クラブユース連盟会長を長らく務められた加藤寛さんに呼んでいただき、神戸の人たちに話した時のスライドです。時間があれば加藤さんからもコメントいただければと思います。



2002～2004年の3年間は、SSFスポーツエイド、笹川スポーツ財団から年50万円の助成金をいただき、いろんなところで活用させてもらいました。例えば審判服の代わりのDUOリーグビブスを買ったり、先ほど触れたDUOリーグ保険の導入などです。

学校教育活動中の事故に対しては、保健室で書類を書く災害共済給付で保証されているのはご存じのとおりですが、最初に言ったように、DUOリーグは学校教育活動か

ら離れた地域クラブの活動にしていきたいというものでした。事故が発生したときの保険をどうするかについて保険会社と相談し、SSFスポーツエイドの助成金をいただくタイミングでDUOリーグ保険を開始したということです。

また、池袋の東京リゾート＆スポーツ専門学校と連携したトレーナー制度もスタートしました。試合会場へのトレーナー派遣からはじまり、希望するクラブへの日常的な派遣、写真にあるトレーニング講習会や、テーピング講習会・栄養講習会なども実施しました。専門学校の先生方と連携し、学生の実習として進めていました。リゾスポの学生たちが「DUO新聞」を作って配信してくれた時期もありました。クラブ単位ごとだと難しくても、リーグ単位であればできることがあります。審判資格取得のための講習会も、リーグ単位で行っていました。

「DUOリーグボランティア」が、試合結果の集計やDUOリーグ通信の発行を担ってくれた時期もありました。

「オフシーズンにはフットサルを！」のメッセージにあるとおり、2001年度から東京都サッカー協会（TFA）フットサル委員会主催でU-18フットサルの公式大会が始まります。リーグ戦のないオフシーズンにフットサルを促したもので、DUOクラブも多数参加していました。私はフットサル委員会のユース部会長をいまも続けています。





オフシーズンにはフットサルを！

DUO リーグ通信 2002-20（2002 年 11 月 19 日）

リーグ期間がシーズンです。１～３月は「オフシーズン」及び次年度へ向けての「プレシーズン」。これはＤＵＯリーグが広めようとする考えの一つです。そして、「オフシーズンにはいろんなスポーツを！」ということもユース年代には必要でしょう。

他のスポーツというわけではありませんが、「オフシーズンにはフットサルを！」ということを声を大にして言いたい！　これはお勧めです。生涯スポーツとして、特に都市型スポーツとして人気急上昇中のフットサルに慣れ親しんでおくことは都民として（県民も）不可欠ですし、フットサルを通して“フットボール仲間”が増えることでしょう。もちろんサッカーのトレーニングとして有効であることは言うまでもありません。東京都サッカー協会フットサル委員会では、このような考えに基づき、昨年度より、サッカーのオフシーズンにフットサルの第２種大会を開催することになりました。８月の「東京都フットサルチャレンジU-18」と、１月末～２月の「東京都ユース(U-18)フットサル大会」がそれです。

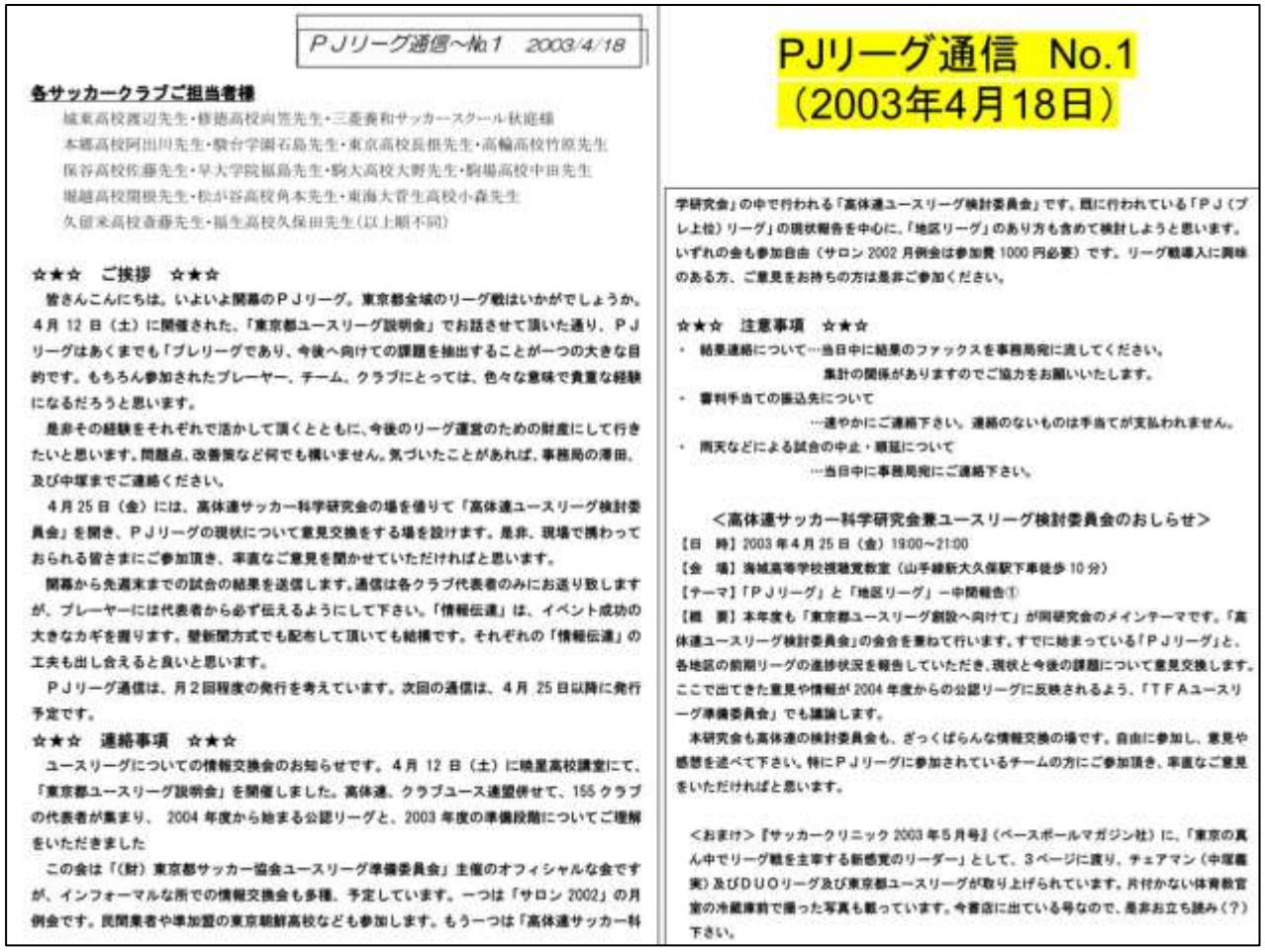
現在、「第２回東京都ユース(U-18)フットサル大会」の参加チームを募集しています。募集要項を添付しましたので内容をご確認の上、是非ご参加ください。12月17日が締切りですので、忘れないうちにお早めにどうぞ。

追伸）１クラブから何チームでも出られます（各チームに付添い大人一人必要）。サッカー部員でなくても出られます。各学校、または友人・知人に広く声をかけていただけるとなお良いと思います。

◆公認化へ向けて

公認化へ向けた話です。東京都サッカー協会の中でユースリーグ準備委員会ができ、私は委員長として準備を進めていました。規約の整備などと並行して、公認リーグがスタートする前年に「プレ上位リーグ（PJリーグ）」を東京都全域でやり、まだ本格リーグを経験していない学校運動部や地域クラブに経験してもらうことにしたのが2003年度です。

そこでも「PJリーグ通信」でメッセージを発信していました。



PJリーグ通信～№1　2003/4/18

各サッカークラブご担当者様

城東高校渡辺先生・修徳高校向笠先生・三菱養和サッカースクール秋庭様
本郷高校阿出川先生・駿台学園石島先生・東京高校長根先生・高輪高校竹原先生
保谷高校佐藤先生・早大学院福島先生・駒大高校大野先生・駒場高校中田先生
堀越高校関根先生・松が谷高校角本先生・東海大菅生高校小森先生
久留米高校斎藤先生・福生高校久保田先生（以上順不同）

☆★☆　ご挨拶　☆★☆

皆さんこんにちは。いよいよ開幕のＰＪリーグ。東京都全域のリーグ戦はいかがでしょうか。４月 12 日（土）に開催された。「東京都ユースリーグ説明会」でお話させて頂いた通り、ＰＪリーグはあくまでも「プレリーグであり、今後へ向けての課題を抽出することが一つの大きな目的です。もちろん参加されたプレーヤー、チーム、クラブにとっては、色々な意味で貴重な経験になるだろうと思います。

是非その経験をそれぞれで活かして頂くとともに、今後のリーグ運営のための財産にして行きたいと思います。問題点、改善策など何でも構いません。気づいたことがあれば、事務局の澤田、及び中塚までご連絡ください。

４月 25 日（金）には、高体連サッカー科学研究会の場を借りて「高体連ユースリーグ検討委員会」を開き、ＰＪリーグの現状について意見交換をする場を設けます。是非、現場で携わっておられる皆さまにご参加頂き、率直なご意見を聞かせていただければと思います。

開幕から先週末までの試合の結果を送信します。通信は各クラブ代表者のみにお送り致しますが、プレーヤーには代表者から必ず伝えるようにして下さい。「情報伝達」は、イベント成功の大きなカギを握ります。壁新聞方式でも配布して頂いても結構です。それぞれの「情報伝達」の工夫も出し合えると良いと思います。

ＰＪリーグ通信は、月２回程度の発行を考えています。次回の通信は、４月 25 日以降に発行予定です。

☆★☆　連絡事項　☆★☆

ユースリーグについての情報交換会のお知らせです。４月 12 日（土）に晴星高校講堂にて、「東京都ユースリーグ説明会」を開催しました。高体連、クラブユース連盟併せて、155 クラブの代表者が集まり、 2004 年度から始まる公認リーグと、2003 年度の準備段階についてご理解をいただきました

この会は「(財) 東京都サッカー協会ユースリーグ準備委員会」主催のオフィシャルな会ですが、インフォーマルな所での情報交換会も多種、予定しています。一つは「サロン 2002」の月例会です。民間業者や準加盟の東京朝鮮高校なども参加します。もう一つは「高体連サッカー科学研究会」の中で行われる「高体連ユースリーグ検討委員会」です。既に行われている「ＰＪ（プレ上位）リーグ」の現状報告を中心に、「地区リーグ」のあり方も含めて検討しようと思います。いずれの会も参加自由（サロン 2002 月例会は参加費 1000 円必要）です。リーグ戦導入に興味のある方、ご意見をお持ちの方は是非ご参加ください。

PJリーグ通信　No.1
（2003年4月18日）

☆★☆　注意事項　☆★☆

- 結果連絡について…当日中に結果のファックスを事務局宛に流してください。
  集計の関係がありますのでご協力をお願いいたします。
- 審判手当ての振込先について
  …速やかにご連絡下さい。連絡のないものは手当てが支払われません。
- 雨天などによる試合の中止・順延について
  …当日中に事務局宛にご連絡下さい。

＜高体連サッカー科学研究会兼ユースリーグ検討委員会のおしらせ＞

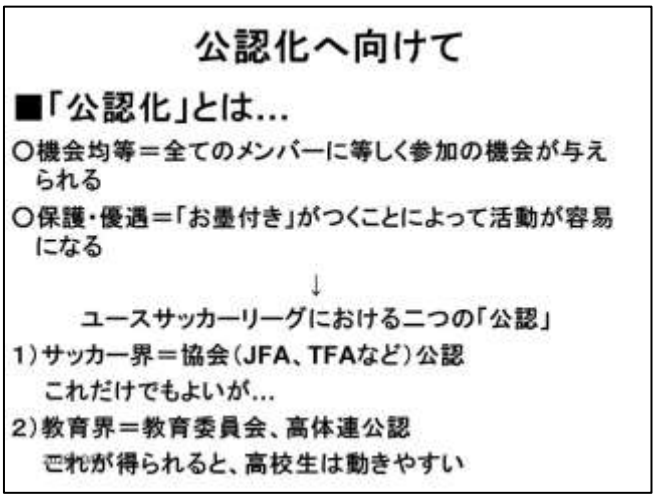
【日　時】2003 年 4 月 25 日（金）19:00～21:00
【会　場】海城高等学校視聴覚教室（山手線新大久保駅下車徒歩 10 分）
【テーマ】「ＰＪリーグ」と「地区リーグ」－中間報告①
【概　要】本年度も「東京都ユースリーグ創設へ向けて」が同研究会のメインテーマです。「高体連ユースリーグ検討委員会」の会合を重ねて行います。すでに始まっている「ＰＪリーグ」と、各地区の前期リーグの進捗状況を報告していただき、現状と今後の課題について意見交換します。ここで出てきた意見や情報が 2004 年度からの公認リーグに反映されるよう、「ＴＦＡユースリーグ準備委員会」でも議論します。

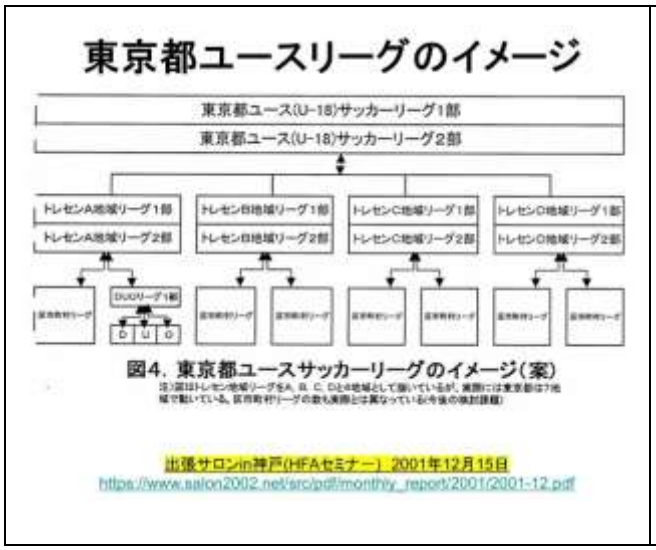
本研究会も高体連の検討委員会も、ざっくばらんな情報交換の場です。自由に参加し、意見や感想を述べて下さい。特にＰＪリーグに参加されているチームの方にご参加頂き、率直なご意見をいただければと思います。

＜おまけ＞『サッカークリニック 2003 年５月号』（ベースボールマガジン社）に、「東京の真ん中でリーグ戦を主宰する新感覚のリーダー」として、３ページに渡り、チェアマン（中塚義実）及びＤＵＯリーグ及び東京都ユースリーグが取り上げられています。月付かない体育教官室の冷蔵庫前で撮った写真も載っています。今書店に出ている号なので、是非お立ち読み（？）下さい。

公認化の意義として挙げられるのが、「機会均等」と「保護・優遇」です。サッカー界と教育界の両方から公認されることが、ユース年代のリーグ戦にとって重要だと認識していました。

東京都高体連サッカー専門部の8つの地区割を活かして底辺からリーグを積み上げ、1部、2部は東京都全域で行うイメージです。前期・後期で昇降格のあるリーグが展開され、合間にカップ戦もある。DUOリーグを始めた当初から考えていたイメージです。







2003.6.12.

東京都ユースサッカーリーグ“規約”ver.4

1．名　称	U-18東京都リーグ1部・2部	U-18東京都リーグ3部	U-18東京都○○地区リーグ
2．主　催	(財)東京都サッカー協会		
3．主　管	東京都ユースサッカーリーグ、U-18東京都リーグ実行委員会		U-18東京都○○地区リーグ実行委員会
	(「東京都ユースサッカーリーグ」は2005年度までにNPO法人化)		(リーグによっては法人格を持つところもある)
4．後　援	東京都教育委員会(交渉中)、東京都高等学校体育連盟(交渉中)、東京都クラブユース連盟、他		
5．協　賛	未定(交渉中)		
6．期　間	通年(前期4～7月、後期9～12月)		前期4～7月、後期9～12月
7．会　場	原則として、参加チームが確保する		
8．参加資格			
1)加盟クラブ			
	東京都に本拠地を置き、(財)日本サッカー協会に加盟または準加盟している団体		
	年度当初にクラブ単位で「東京都ユースサッカーリーグ」に加盟する		
2)参加チーム			
	加盟クラブは、「リーグ戦参加チームの条件」を満たすチームを編成し、リーグ戦に参加することができる		
	リーグ開幕前に、「リーグ戦参加チームの条件」を明記した「チーム登録票」(兼プログラム原稿)をリーグ事務局に送付する。		
	原則として前期・後期の各リーグ期間中は、登録内容の変更は認めない(前期・後期の各リーグ終了後、チームを編成し直すことができる)		
3)参加プレーヤー			
	(財)日本サッカー協会に選手登録している者(以下、選手と呼ぶ)		
	選手はリーグに登録されたチームからのみ出場できる		
	異なるクラブ間の移籍は、JFA基本規定「第5章　移籍」を適用する		
	同一クラブ内の移籍は、別に「移籍規定」を定める		
4)出場資格			
	試合開始30分前までに、メンバー表を本部と相手チームに提出する		
	各試合ベンチ入り選手は最大20名とする		交代選手数は各リーグで定める
	各試合につき9名までの交代を認める		交代選手数は各リーグで定める

「学校教育活動」よりも「地域のスポーツ活動」と捉え、
リーグ戦を通して「クラブ」を育てようと考えた。

微修正を繰り返しながら規約案を整えていきました。カテゴリーごとに求める内容も異なります。

Ver4は最終案の前の版ですが、「加盟クラブ」という表現です。リーグに加盟するのはクラブであり、各クラブがチームを編成するという基本的な考え方です。「リーグ戦を通してクラブを育てる」という意図を伝えようとしていたことがわかります。しかし最終案で、加盟クラブは「加盟団体」に置き換えられました。「わかりにくい」という声を受け入れたものです。残念です。

将来的には、リーグ自体が法人化することを目期していました

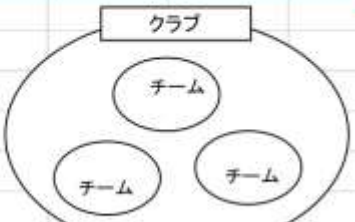
リーグ戦参加チームの条件

①選　手	JFAに第2種登録された選手が11名以上いる		
	未登録選手は出場することができない		
	特別枠選手は認めない		特別枠選手は各リーグで定める
②指導者	責任能力のある大人（20才以上）が帯同できる		
	有資格者であること（指導者資格または教員免許取得）		資格は問わない
③審　判	定められた試合に審判員（主審1名、副審2名）を派遣できる。主審は有資格者		
	主審は東京協会から派遣	主審は東京協会から派遣	主審は4級以上
	副審は東京協会から派遣	副審は4級以上	副審は審判を志す者以上
④グラウンド	定められた試合（ホームゲームまたは1節分）を主催できる		
⑤参加費	定められた参加費を支払う		
	70,000円／年（5,000円×14試合）	56,000円／年（4,000円×14試合）	20,000円／各期（約3,000円×7試合）
⑥保　険	全選手がスポーツ傷害保険に加入していること		

※「チーム」と「クラブ」の用法は、現行のJFA基本規定とは異なるが、「JFAクラブ申請制度」の趣旨を鑑み、将来的な展望を視野に入れた上で、本リーグでは「加盟クラブ」「参加チーム」と使い分けることとした。用語の整理は下表を参照いただきたい。

参考：用語の整理

名　称	手続き	期　間	経　費	分　類
クラブ	加　盟	年　度	加盟費（分担金）	会　員
チーム	登録・参加	リーグ期間	参加費	参加者
プレーヤー	入　会	年　度	会　費	会　員
（選　手）	登録・参加	リーグ期間	－	参加者
	エントリー	試合ごと	－	出場者

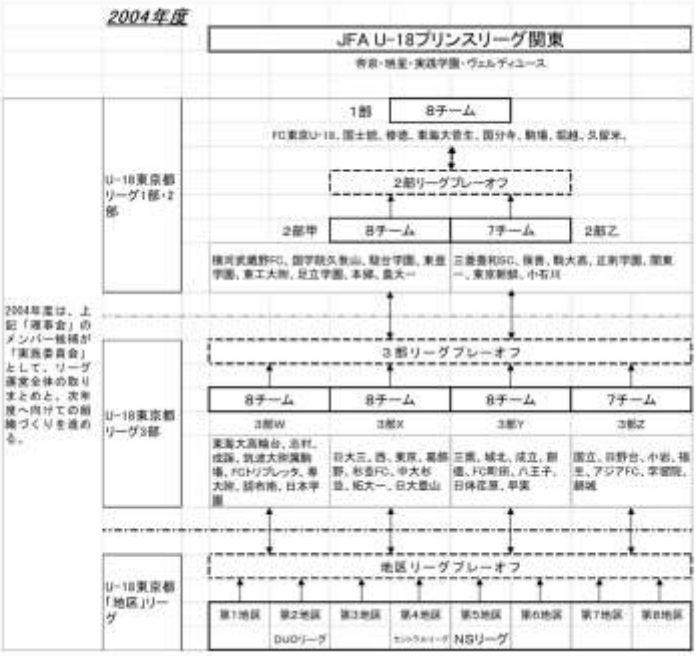


◆突然の中止決定！

2月に総会を開き、初年度の構成も承認され、2004年4月から東京都全域でオフィシャルリーグがドカンと始まるところまできていました。

しかし3月になって突然の中止が決定されます。

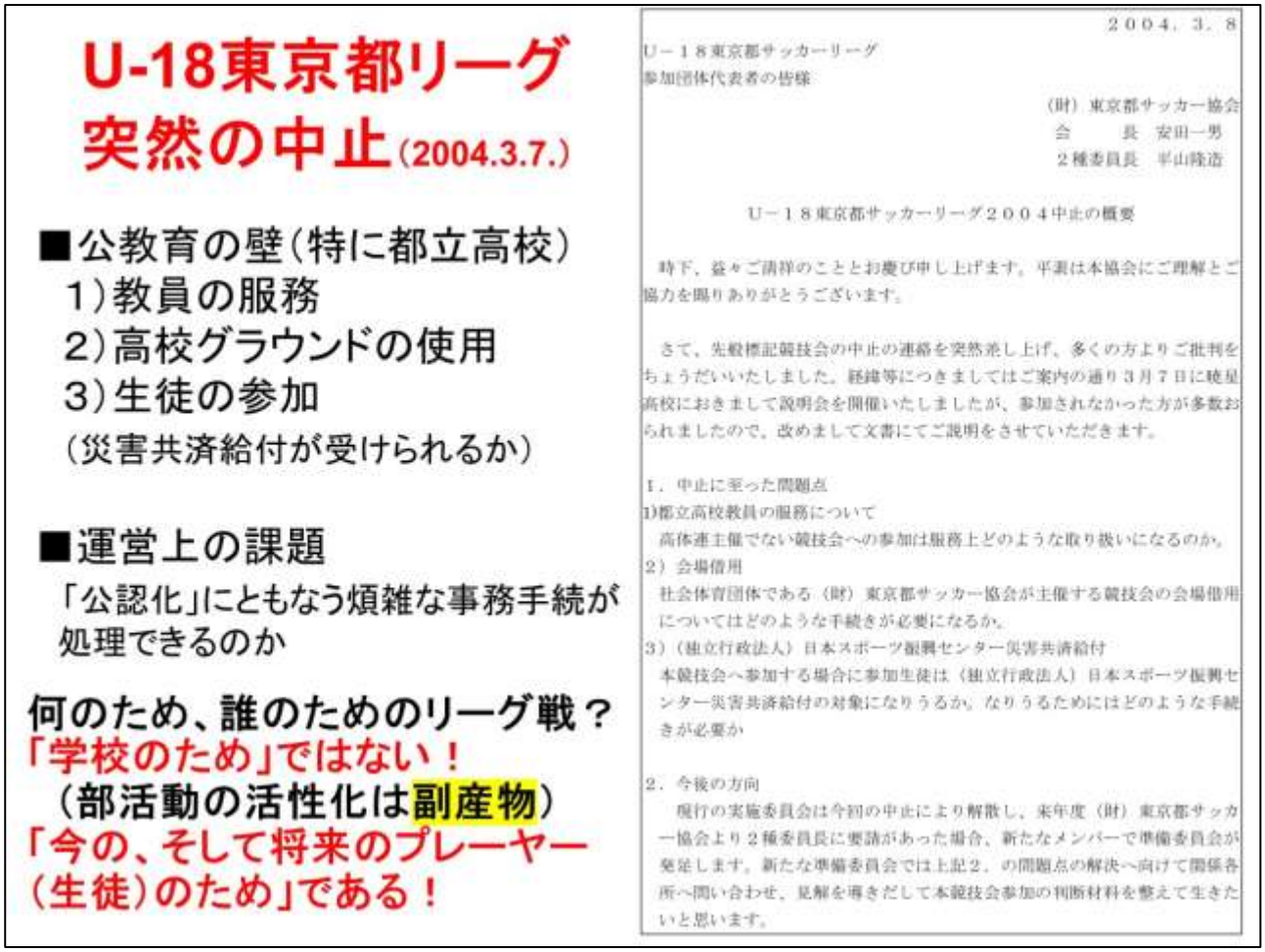
都立高校がこのリーグにどのような形で参加できるのかという問い合わせが、都立の校長先生から教育委員会に多数寄せられたということです。顧問教諭はどういう立場で引率するのか、学校のグランドをサッカー部が占有することにならないか、サッカー部員の過重負担にならないかという疑問の声です。



突然の中止には驚きました。こちらは学校のためで

はなくスポーツのため、生徒のために始めるのに、こんなことが理由でできなくなるとは。非常に悔しい思いというか、不本意というか…。

こんな思いをしたのが2004年度がはじまる直前でした。



その後、私は東京都のオフィシャルリーグの動きから外れましたが、今日も来られている玉生さんらが中心になって地区リーグ同士の連携を図り、地区トップリーグを底辺から整備し、2011年度には底辺から頂点まで、つまりトップのプレミアリーグからDUOリーグ3部までつながる構造が確立したというわけです。



実はDUOリーグの10周年のころは、公認リーグ中止事件があった後でした。だからそのときもこの件は取り上げました。

けど私自身、まだその出来事を自分の言葉で語れるほど整理できていなかったし、そんな気にもなれなかったので、10周年の時はあまり言わなかったと思います。けど学校教育とどのようにすり合わせていくのかは大事なところですよね。いま部活動の地域展開が進む中で、あの頃言っていたことがようやく理解されるようになってきたと感じますが、依然として難しい問題を含んでいるなと感じています。

◆DUOリーグのいま

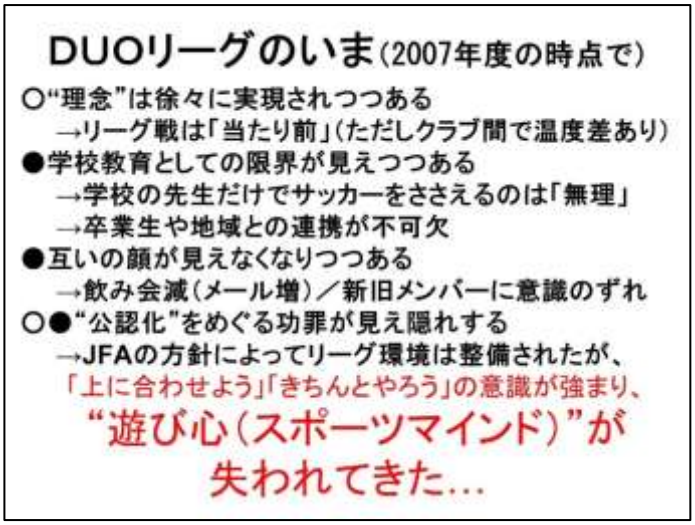
時間がなくなってきたのでどんどん進めます。

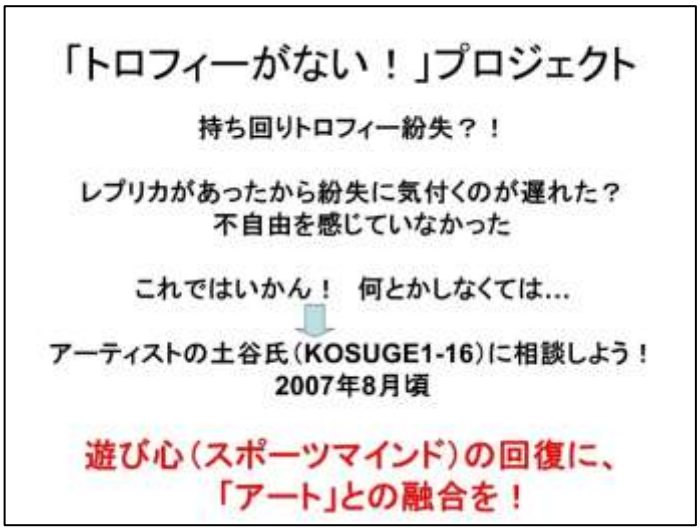
「DUOリーグのいま」と書いていますが、2007年度の状況です。結論を言うと「“遊び心”が失われてきた」ということです。

レベルに合ったカテゴリーでプレーできればいい。そこが自分たちの居場所であるならそこを充実させればいいと思うんですが、上とつながったからでしょうか、指導者の会話やDUO会議で出てくる話は「上に合わせよう」「きちんとやろう」の話ばかりです。

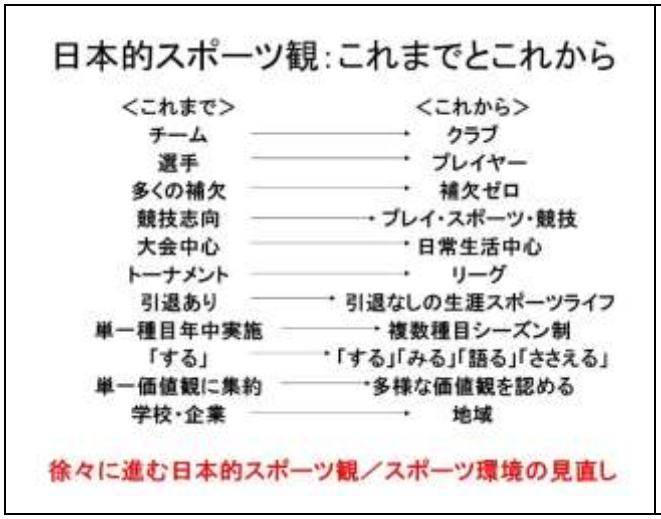
こんなときに、「DUOリーグのトロフィーがない！」という間抜けな事態が発生しました。持ち回りトロフィーをどこかのクラブがなくしてしまったんです。レプリカがあったので気付くのが遅れてしまいました。

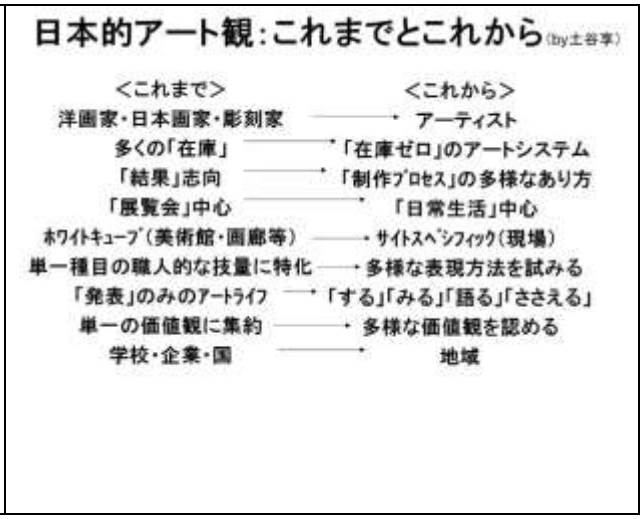
この、ちょっと間抜けな出来事を、アートの人たちと組んで何かやろうじゃないかということで、今日もオンラインで参加されている、いまはNPOサロン2002理事を務める土谷享さんに相談しました。トロフィーを作るところ自体をアート活動として、DUOリーグ全体で、失われつつあった遊び感覚でトロフィーをつくろうじゃないかということです。





「日本的スポーツ観：これまでとこれから」は、いろんなところでよく使っているものです。チームからクラブへ、選手からプレイヤーへ。選手というのは選ばれた人のことですね。選ばれる人がいるから補欠がいる。そうじゃなくて、遊ぶ人、プレイヤーという言葉を使おうと。スポーツの方でこういう方向性を示したところ「アートの世界でも同じですよ」と土谷さんが言われ、まとめられたのが右の図です。





「展覧会」中心で「結果」志向。だから展覧会が終わると多くの在庫が残ってしまう。そうじゃなくて「日常生活」中心で「在庫ゼロ」のアートシステムを目指そうと。

こんな感じで意気投合していた土谷さんらアーティストのアトリエへ出向いて作戦会議を開きました。私と、京華高校の小金丸さん。玉生さんや岸さんもいましたよね。クラブワールドカップの試合をみて、鍋をつついて飲みながら、ああでもないこうでもないと話をしていたら、「靴創家」の佐藤いちろうさんがやってきて、「履けなくなったサッカーシューズで履けるトロフィーを作ろう」ということになりました。

◆「トロフィーがない！」プロジェクト

DUOリーグのロゴは土谷さんがつくってくれました。歯磨きの上にDUOリーグが乗っています。DUOリーグの「トロフィーがない！」プロジェクトをDUOリーガーに知ってもらうために、勉強机の前に貼ってもらえるようなカレンダーも作りました。カレンダーは、このころ1,000人ぐらいいたすべてのDUOリーガーに配布しました。DUOリーグと「トロフィーがない」プロジェクトを身近に感じてもらう意図です。



写真は2008年度のシーズン初め、本郷高校の教室で「靴磨き講習会」をやっているところです。当時のサッカーシューズは革の部分が結構ありましたが、履けなくなると燃えないゴミで捨てられるだけです。このプロジェクトでは、履けなくなったサッカーシューズから革の部分を切り取り、靴型に貼り合わせてトロフィーをつくるというものです。まずは靴を綺麗に手入れするところからはじまります。生徒だけでなく、各校の顧問の先生や三菱養和のコーチも参加しました。



前期リーグでは、試合後に両チームのプレイヤーが集まって、履けなくなったサッカーシューズを磨いて、革の部分を切り取る作業をいろんなところで、すべてのクラブが行いました。






この取り組みは2008年7月19日の朝日新聞夕刊に写真入りで紹介され、同日行われたDUOリーグアウォーズで披露されました。世界初、「履けなくなったサッカーシューズでできた履けるトロフィー」です。右足用と左足用があり、それぞれ前期用と後期用です。「12年間使おう」「12年経ったらまたつくろう」としていましたが実現していません。

トロフィーができた後も「リサイクルプロジェクト」や「スキンプロジェクト」の名称で、靴磨き講習会や、サッカーボールでコインケースをつくるワークショップなどいろいろやっていました。

けど、DUOリーグに関わる大人たち、とくに「部活先生」にはこういう“遊び”のおもしろさはなかなか届きません。それは、リーグ環境が整備される中で、「上を目指す（上に合わせる）」ことがより強く意識されるようになってきたからかもしれません。



このプロジェクトの意義は？

1）ともに”ゆたかなくらし”を担う文化である“スポーツとアートの融合”であること
2）単なる廃品と化していた「履けないシューズ」を再生させる“リサイクル運動”であること
3）高校生自身がハサミやカッターを持って作業することで“生きる力”を獲得する試みである
4）靴磨き・解体講習会が、クラブを越えた仲間が集う“交流の場”となった
5）“遊び心”を取り戻す試みであった

◆DUOリーグの改革－将来構想委員会と現状

後期リーグ期間は学校行事や公式戦との重なりが

あり、試合を消化するのが大変でした。試合消化に追われる中で、“遊び”に目が向かなくなってきたのかもしれません。

今後の方向性を話し合う場として「将来構想委員会」が設けられました。2012年度です。今日も来られていますが、私の後任チェアマンとなった岩野英明さんが示した“たたき台”をベースに、DUOリーグの軌道修正が図られました。そして2013年度から、昇降格のあるリーグ戦は前期だけにして、後期は会場の広さに合わせた「フリーサイズフットボール」をすることにしました。

筑波大附会場では、8対8の半面サッカーのワンデー大会を数回行いました。企画・運営を通して高校生は大きく成長します。しかしこうした取り組みも、公式戦の勝利にしか目が向かない「部活先生」は積極的ではありません。

DUOリーグが大事にしてきた“遊び心”と、オフィシャル化の中で広がっていく「上に合わせよう」「きちんとやろう」という意識が徐々にずれてきたのだと思います。

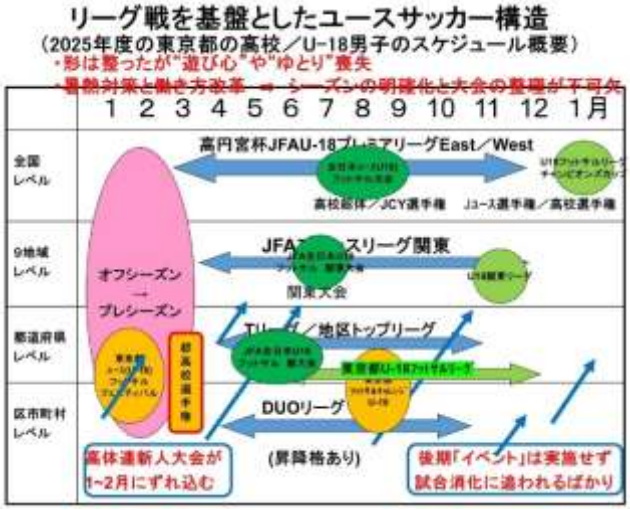
2014年度末でチェアマンを交代しました。「20年もチェアマンが変わらないような組織はつぶれる」と10周年シンポジウムで言いましたが、19年間務めて交代しました。

これまで積み上げてきたものの見直しが、第2代の岩野チェアマン時代だったと思います。「4年でチェアマン交替」と宣言していましたが、その矢先、コロナ禍に突入します。嶋野さんへの交代は2022年度からです。

いま、フットサルも含めたU-18サッカー構造は図のようになっています。





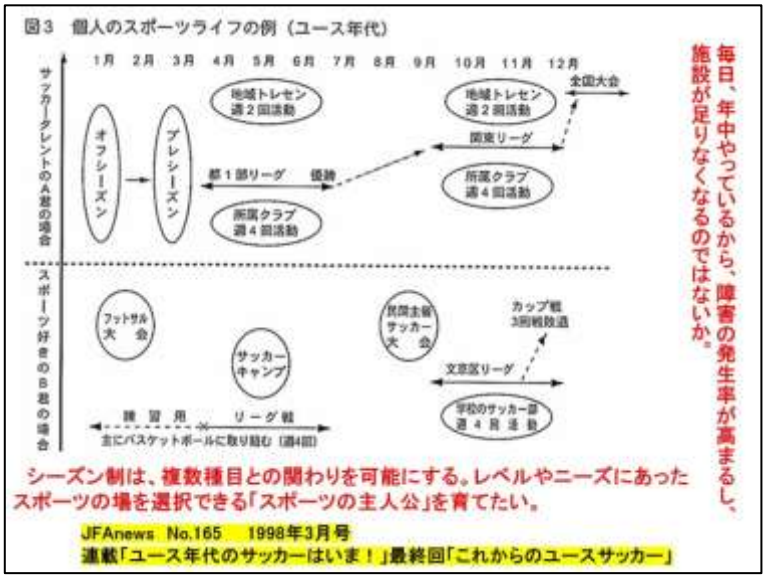


◆現状をどう捉えるか

当初考えていたリーグ構想は、サッカーだけじゃなくて他のスポーツにも広げていくものでした。すると個人のスポーツライフも変わってきます。サッカータレントのA君は、年間を通してサッカーをすることができます。いろんなスポーツをやりたいB君は、例えば春はバスケ、秋はサッカーというマルチスポーツライフが楽しめます。こういう環境を目指そうと言っていたのですが、リーグ戦が競技団体マターになってくると、「年間を通してサッカーができる環境づくり」となってしまい、当初考えていたマルチスポーツライフにはつながりません。

「ユース年代にリーグ戦を！」ということはもちろん言い続けますが、リーグとは何かということを改めて考えておきたいと思います。

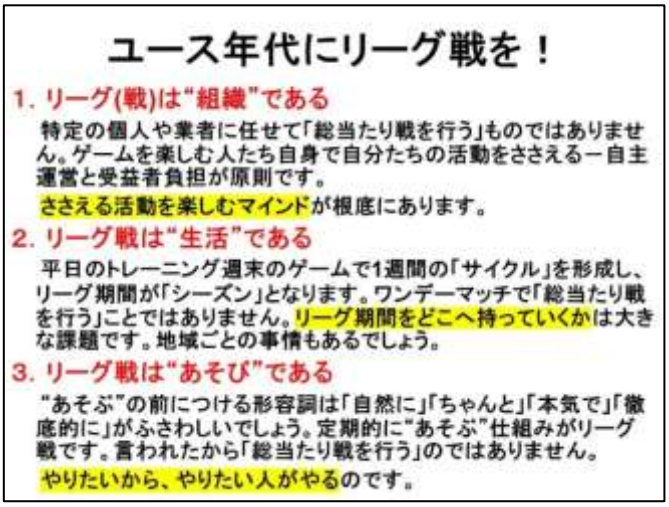
リーグは“組織”であり“生活”であり、何といっても“遊び”です。

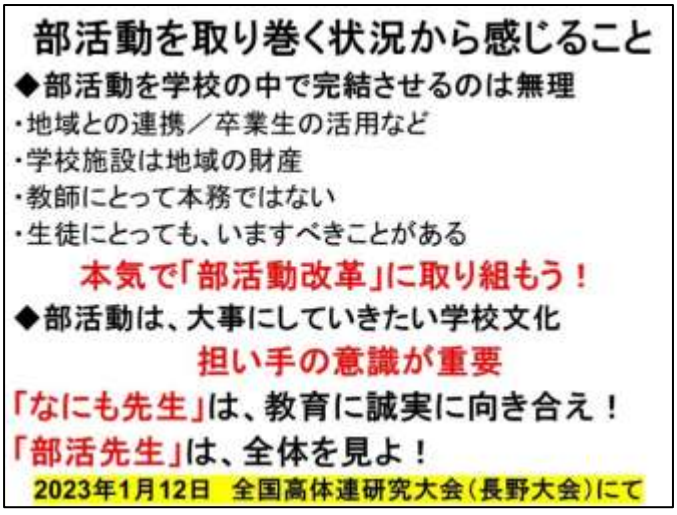


３．いま思うこと

時間がなくなってきました。最後に「いま思うこと」を駆け足で述べます。

「部活動を取り巻く状況から感じること」は、学校運動部の指導者向けのメッセージです。全国高体連研究大会、いろんな種目の「部活先生」が集まるところで、研究部の前活性化委員長として講演させてもらった時のものです。





「本気で部活動改革に取り組もう」なのですが、同時に、「部活動は大事にしていきたい学校文化」です。そのためには「担い手の意識が重要」です。

担当教科の指導しかしようとしない「なにも先生」は「教育に誠実に向き合え！」。逆に、部活にしか目が向かない「部活先生」は「全体を見よ！」ということです。

全体を見た時に、生徒も教師も余裕がなくなり、どんどん“遊び”が下手になっていることを感じます。私はずっと「生徒の変化（大人も…」に挙げたようなことばかり言っています。考えろ、アクション起こせ、全体をみろ、あいまいにするな、やり切れ、ちゃんと遊べ…

言われたことはきちんとやるし、素直だけど、コミュニケーションの質と量が大きく変わり、ソウゾウリョク欠如、決断できない。迷ったらやらない…。コロナ禍を経て、この傾向は一層強まったと感じています。

何といっても、原点は“遊び”です。

スポーツは多くのものをもたらしてくれるけれど、得られたものはすべて、実は“副産物”なのではないかと思うんです。DUOリーグの理念に掲げたことですら、です。たとえば、確かに「スポーツの生活化」のために始めましたが、好きな遊びをやっていたら、気がつけばサッカーが生活の一部になっていたということではないでしょうか。

ちゃんと遊ぶために大切にしてほしいことは「情報共有」です。要項やマニュアルを整備することはコロナ禍で求められましたが、それ以上に大事なのは、マニュアルに書かれていることの背後にあ

る“理念”や“志”、もっというなら“魂”を共有することです。

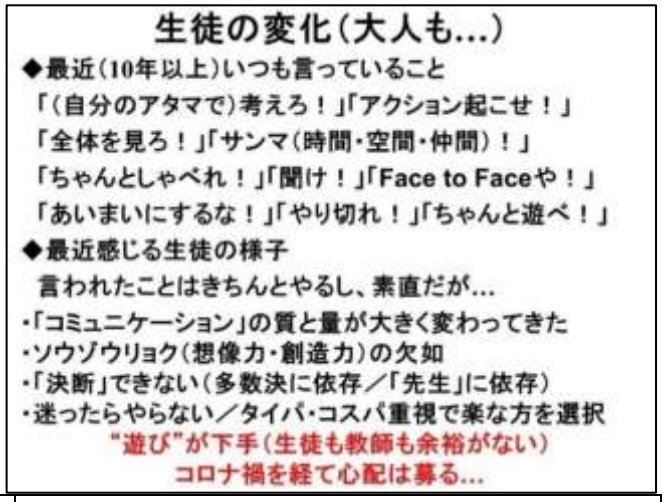
“魂”を共有するためには、肉声を、“Face to Face”で伝えないとダメですね。こういうことを心がけながら、「はじめる！　やり切る！」。はじめればはじまるんです。

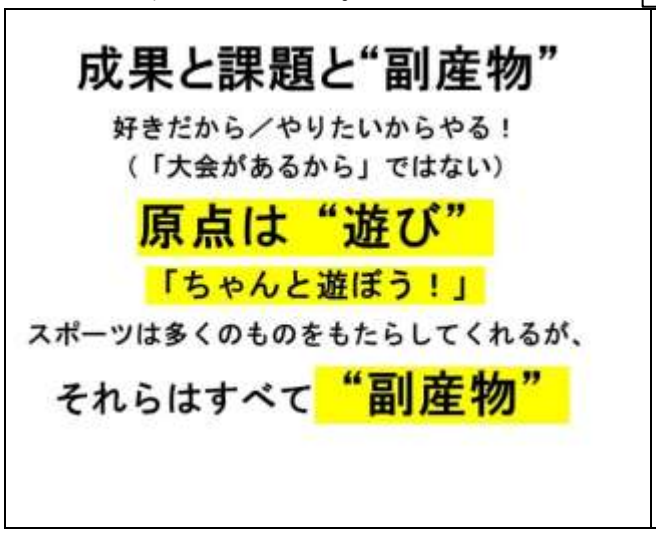
30年前に、はじめたからはじまりました。仲間とともに徹底的に遊びを追求し、いまに至ります。

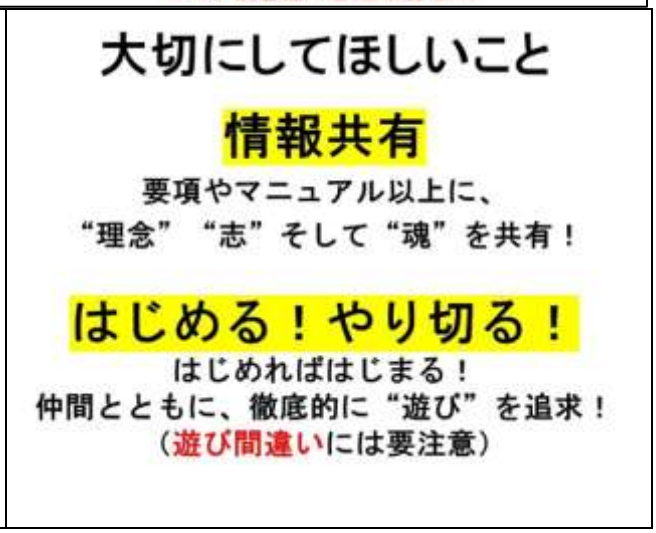
「遊び間違い」には要注意ですね。遊びをおちゃらけてやることだと思っている人がいますが、そうじゃありません。本気で、徹底的にやり切るんです。

ボリュームが多すぎて最後は駆け足になってしまいましたが、今後に向けて徹底的にやりきってもらいたいという思いを、初代チェアマンとして話させていただきました。

ありがとうございました。







井上：中塚先生ありがとうございました。

郁文館のリーグ参加は。最初からではないんですけど、話をお聞きしていて20年ぐらい前のことを思い出しながらお聞きしていました。本当に手弁当でやっていて、あったかいリーグのスタートだったと思います。私も試合会場を自転車で周り、運営費を届けていた頃がありました。そういったことを経過しながら、いま本当にリーグがしっかり整っているところでありますが、いまの中塚先生のお話の通り、本気の“遊び”といったところを忘れずに、このリーグを進化させていくようになっていきたいと思います。

第1部の講演を終わらせていただきます。8分間の休憩を取り、15時15分から第2部を開始します。

高校生はここで解散です。練習に向かってください。

第 2 部．元 DUO リーガー座談会「DUO リーグの成果と課題と副産物」

１．中澤篤史：DUOリーガーから部活研究者へ

注）発表者の要望により、報告書には概要のみ掲載。



◆自己紹介－含DUOリーグの思い出

東京大学ア式蹴球部に入部し、「サッカーを楽しもう」と思っていたけれど、大学のサッカー部は苦い思い出として残っている。理由は、①レギュラーになれない二軍生活、②厳しく辛い抑圧的な体育会文化、③まったく楽しくないスポーツ経験であった。

大学4年生の2001年度に、東大サッカー部のBチームがDUOリーグに参加する機会を得た。東大サッカー部の歴史からみてもエポックメイキングな出来事だったと思う。DUOリーグに参加することで、①補欠でも試合に出られる喜びが感じられ、②自由に楽しむ可能性への気づきを感じ、③「不思議な部活」をめぐる学問的関心につながり、大学院に進んで本格的にスポーツのあり方を学問的に考えることにつながった。

思い返すと、大学4年生のときに筑波大学附属高校のグラウンドでのDUOリーグの試合後、「護国寺の居酒屋行くけどお前来るか？」と、中塚理事長に声をかけてもらい、わけがわからないまま「行きます！」と言って参加したところから私の部活研究者としての歩みは始まったかもしれない。部活を研究する意味を探り、現場にどう還元するのかという試行錯誤はあの時から始まり今も続いている。

◆部活研究者としての歩み

大学院ではサッカーから離れて研究一筋でやっていた。東大大学院の教育学研究科に提出した博士論文は、部活をテーマにした研究としては東大初だったようだ。それを本にまとめ、『運動部活動の戦後と現在』という著書を刊行した。スポーツと学校教育は、本来は結びつかないものかもしれない。スポーツは遊びで、学校は「遊んでないで勉強しなさい」という権力装置の側面もある。部活動には自由と権力の不思議な絡まり合いがあるということを理論的に考え、部活研究を構成した。

しかし部活の研究成果を現場に還元するとなると、硬い論文や書籍では伝わらない。もっとわかりやすく書かないといけないし、人が感じる悩みとか思いに対して直接対話するようなものを作り直さなければならない。研究と現場をつなぐ架け橋になりたいと思い、『そろそろ、部活のこれからを話しませんか』を著した。また、部活の中心的な主人公であるはずの中学生、高校生はいろんな思いを持って部活に関わっている。名古屋大学の内田良さんと一緒に、岩波ジュニア新書から『「ハッピーな部活」のつくり方』という本を書いたり、YouTubeで部活動について情報発信している。面白い部活をもっと面白くしてほしいし、嫌な部活だったら楽しく作り替えてほしいというメッセージを出すようにしてきた。

部活研究で何をしたらいいのか迷うところもあるが、やはり原点として、DUOリーグで経験させてもらった、「スポーツは、いろんな可能性を持って楽しくできるのだ」ということがある。

遊ぶことの価値を大事にしながら、これからも研究を続けていきたいと思っている。

２．瀬田元吾：ドイツ×DUOリーグ

注）発表者の要望により、報告書には概要のみ掲載。



◆自己紹介－含DUOリーグの思い出

学習院高等科は初年度後期からDUOリーグに加盟し、1年次から出場している。卒業後は筑波大学に進み、中塚さんの後輩となり、教育実習も筑波大附高にお世話になった。大学卒業後、少し現役を続けた後にドイツに渡り、フォルトゥナ・デュッセルドルフというクラブで引退後のセカンドキャリアを続け、15年半ドイツにいた。2020年に帰国し、V・ファーレン長崎で一年、2021年12月からは水戸ホーリーホックに執行役員として着任し、いまに至る。

1年次から出ていたDUOリーグだが、当時の自分はただリーグ戦で試合数が増え、近くの高校生と試合ができるとしか考えていなかった。ドイツで長年過ごしたいま、補欠ゼロ、引退なしなどの発想は、ドイツのサッカークラブのあり方そのものだったと思う。部活動の地域移行・地域展開といった課題解決のヒントになる、非常に面白い存在だと思う。

◆ドイツと日本のスポーツ環境

ドイツのスポーツ環境を歴史的にみてみると、クラブのはじまりは日本の部活動とそう変わらないものだった。強いゲルマン人を育てるために、体操の先生が地域で始めた体操クラブが原点である。そこにスポーツをしたい人が世代を超えて集まるようになり、スポーツクラブとなった。しかし、大戦期に政治的に利用されたスポーツクラブは、戦後、その多くが取りつぶされ、3分の1に減ってしまった。戦後は工業化、経済成長が進む中で、人々の心身の健康問題が大きな課題となり、1960年に「ゴールデンプラン」が国の政策として始まった。人口に応じてスポーツ施設を整えクラブを育て、スポーツ参加を促す政策である。これによりクラブは増え、スポーツ人口は4倍になった。いまドイツには、スポーツクラブが約9万、2,400万人がスポーツを楽しんでいる。人口が約8,000万人のドイツでは、多くの国民がスポーツを楽しめる環境にあると言える。約2.4万はサッカー部門を持つクラブで、サッカー協会登録人口は700万人。世界でも最大規模の組織である。ドイツでは、地方の7部、8部リーグのクラブでも、充実したスポーツ施設やクラブハウスを持ち、地域社会の交流の場となっている。

ドイツでは学校単位の部活はやっていない。学校は勉強する場所であり、好きなスポーツは学校が終わってスポーツクラブで行う。時間帯をずらしながら、多世代が地域クラブで活動している。

では日本はどうか。約18,000の小学校、9,800の中学校にスポーツや文化活動のインフラが整っている。ドイツは地域で整えたが、日本は学校で整えてきた。これを活かさない手はない。

DUOリーグのことをよく知らずに受動的に生活していた高校時代だったが、自分の意思でドイツに行き、たくさんの気づきを得て、ドイツと日本の違いとはこういうことだったんだと感じた。

◆今後に向けて

中塚先生がDUOリーグを立ち上げたのが35歳の時だとお聞きした。バイタリティーと発想力、着眼点が素晴らしかったと思う。当時は先に行き過ぎた考えだったと思われたかもしれないが、いま時代が追いつき、実際に地域移行・地域展開が進んでいる。DUOリーグの取り組みに、これからのヒントがあるのではないか。

学校も地域も部活動もクラブも、全ては地域のコミュニティ作りである。このように考える人間が出てきたのもDUOリーグの“副産物”かもしれない。

３．岸卓巨：高校時代の居場所から、ケニアの子どもたちの未来へ

皆さんこんにちは。一般社団法人A-GOAL代表の岸と申します。

瀬田さんからヨーロッパのお話がありましたが、私からはアフリカの話です。先ほどヨーロッパには54ヵ国あるということを初めて知りました。実はアフリカも54ヵ国です。日本政府が認めていない西サハラという国を入れると55ヵ国ですが、日本政府としては54ヵ国です。今年はセネガルという国で初めてユース・オリンピックが行われています。元々イギリス領だったので、その影響でサッカーが盛んだとか、ヨーロッパの話を伺いながらアフリカの話をしたいなという気持ちも高まっていますけど、今日はDUOリーグ30周年です。私自身がDUOリーグの副産物かなと思うところもあり、DUOリーグで学んだことだったり、DUOリーグへの感謝の気持ちをお伝えできたらいいなと思っています。

パートとしては、まずは高校時代のお話。そしてJICA海外協力隊としてケニアに行っていたころのお話。そしていま活動しているA-GOALの、三本柱でお話をさせていただきます。



◆高校時代：サッカー部の落ちこぼれ

高校時代は、おそらくサッカー部で一番下手くそだったと思います。都立小石川高校出身です。

私が入学する少し前に、選手権予選で全国大会の一歩手前まで行ったことがありました。当時はまだ学区制がありましたが、他の学区からもサッカーをやりたい生徒が集まってくるような感じで、その中で私自身はすごく下手くそで落ちこぼれの部員でした。覚えているのは、当時の小石川高校では、授業とは別に放課後、興味ある人はフランス語とか他の言語を学べる授業があったんです。興味があってフランス語の授業を取ったんですが、サッカー部の先輩から「サッカー部でそんなの取るやついねえよ」と言われたのを覚えています。そういうのを取っていると練習する時間は減るし、「お前レギュラーになりたくないのか」みたいなことを言われました。

でも私がその時思ったのは、レギュラーになることにそこまで貪欲じゃなかったというか、それこそ中塚先生のお話にもあったように、楽しむサッカーがしたかったし、私自身プレーヤーというよりもプレーヤーの周りでサッカーをささえる立場で活躍できるんじゃないかなと思っていました。

そのような私ですが、いま何をやっているかというと、スポーツ漬けの毎日です。普段はフルタイムで日本アンチ・ドーピング機構（JADA）で働いています。直近ですとアジア大会がありました。出場するアスリートたちに、日常生活の中で気をつけるべきポイントなどについて話をしています。



それとは別に、今日お話しするA-GOALという活動をNGOとして立ち上げて、その代表を務めています。あとは母校である

中央大学の国際情報学部というところで、「健康・スポーツ」という授業を担当し、昨日も中大の授業でした。

それと、実は私、まだDUOリーグに出ています。明日も淵江高校で試合があります。先ほどのドイツモデルじゃないですけど、西巣鴨中学校のOBでつくったFC西巣鴨03というチームが特別枠で入れてもらっていて、明日も試合があるということです。

母校の小石川高校でも、先日は全校セミナーみたいなところで話をさせていただきました。

本当にサッカー部時代は下手くそで落ちこぼれだったのが、先日はスポーツ庁長官感謝状をいただいたり、すごくスポーツに助けられる、スポーツ漬けの毎日を送らせていただいています。

このような人生に変わったところとしてやはり大きいのがDUOリーグだったなと思っています。多様なスポーツの関わり方を受け止めてくれる場がDUOリーグでした。

高校時代、もともとはプレーヤーでしたけど活躍できなかったところを、途中から審判やマネージャー的な役割をチームの中でやるようになりました。よく覚えているのがDUOリーグ会議です。顧問より出ていたかもしれません(笑)。





よく覚えているのは、本郷高校の阿出川先生が、DUOリーグの優秀審判賞を決めるところで「今日の試合の中で一番頑張ってたのは岸じゃないか」みたいなことを言ってくださったことです。プレーヤーとして居場所がないと感じていたところで、他の学校の先生から認めていただいたり、DUOリーグの運営を通して「いつもありがとう」と他の学校の先生たちから言われたりする場がDUOリーグにはあって、誰かの役に立つことができる喜びを感じられたと思っています。

それと、スポーツは人と人とをつなぐツールだというのを感じられたのもDUOリーグでした。中塚先生のお話にもありましたが、アートの皆さんとのつながりだったりテーピング講習会だったり、いろんな場面でいろんな人たちとつながる機会があったと思います。

今日は郁文館高校から新谷さんがいらっしゃってますが、私も高校生のころからこういう場に顔を出させていただいて、普段の学校生活では繋がらない人たちと繋がれて、サッカーとはそういうツールになるんだなということを感じられました。それが今の活動に生きてきているなと思っています。

◆協力隊時代：ケニアで学んだこと

大学を卒業し、JICAのボランティアでケニアという国に行きました。ケニアで学んだこととして、二つのエピソードを紹介させていただきます。



ケニアではリマンドホームという児童拘置所みたいなところで働いていました。警察に捕まったり保護された子供たちが来る施設です。その時に一番お世話になったのが、右写真のジローさん。ケニア人ですがジローさんです。ケニア生活に慣れてないとき、ジローさんの家に何度も行ってご飯を食べさせてもらったり、とてもお世話になりました。

ある日ジローさんに子供が生まれました。オーシャン君って言います。「見に来てね」ということで見に行きました。みんなでお祝いをして喜んだんですけれど、1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月経ってもオーシャン君は大きくならないんです。手足を動かすこともできません。これは何かの病気だろうということで街の病院に連れて行ったんですけど、生まれた時の影響なのか、原因はわからないけど何か病気があるんじゃないかと。原因を探るためには精密検査を受けなくちゃいけない、お金がかかるということがありました。お世話になっているJICAの保健の専門家に、こういう状況なんだけれど、私はサポートしたいと伝えました。でもジローさんにはそのお金はない。どうしたらいいんだろうということを、保健の専門家に相談しました。その時に言われたのが、「いま助かってもその後困ると思うと、助けないという選択肢も考えた方がいい」ということでした。でも私にとっては、非常にお世話になったジローさんの子供だし、目の前に困っている子がいて助けないわけにいきません。お金を出して一緒に病院に何度も行きました。最終的に5ヶ月でオーシャン君は亡くなってしまいました。奥さんのジャックリンが泣き崩れてたのを、いまでもすごく覚えています。



この時の経験から一つ学んだことは、「子供は生まれてくる場所を選べない」ということです。そのことをすごく感じました。例えばオーシャン君を連れていった集中治療室には酸素ボンベがあったのに、その酸素ボンベには酸素が入ってない状態でした。

オーシャン君の事例じゃないですけど、ケニア全体を見てみると、まだまだ経済的には貧しくて、食べるものが十分になかったり、写真にあるように十分なサッカー用具がない子たちもたくさんいます。ただ、ケニアの子たちも、その前に行っていたバヌアツという南太平洋でも、途上国の子たちを見ていて思うのは、向こうの子たちがかわいそうなのではなく、持ってるものが違うだけだということです。

日本の子供たちもいろんな問題がありますし、それこそ自殺率は日本の方が高かったりします。いろんな問題もある中で、お互い支え合いながら生きていくことがすごく必要じゃないかなということを、このケニアの事例で感じました。



もう一つケニアで学んだことは、サッカーはライフラインになるということです。先ほどはドイツの事例でしたが、ケニアの場合は政府による行政サービスが整ってないんです。地域にゴミが捨ててあっても収集車が来てくれるわけじゃありません。学校に行けない子供もいます。

地域で、ボランティアでやっているサッカークラブの指導者が、子供たちの居場所を作る活動をしています。試合前には子供たちと一緒にゴミを集めて清掃活動をしたり、地域のNGOと連携してワークショップをやったりしています。ですので、サッカークラブの存在が、地域の中でのハブになっていると言えます。

ただ、そのハブを悪用するような人もいます。協力隊の時に、クラブの人たちと一緒に地域の中でサッカーで人を集め、そこで環境教育だったりエイズの検査をするような、1,000人規模のイベントをしました。ケニアの場合、1日がかりのイベントだとお昼ご飯を出さないと人は来ないということで、お昼代をジョージという指導者に渡し、彼がケータリングを手配することになりました。

イベント当日。食券を配り、お昼の時間のケータリングを待っていたけど来ません。お金を渡したジョージに電話をしてもつながらない。全然つながらないんです。最終的にその翌週、ジョージの写真が街中に貼られていました。何だと思ったら、ジョージは選挙に出ていたんです。サッカーで築いたネットワークを使って、その地域の選挙に出馬してたんです。それぐらいサッカーが地域のハブになるし、地域の中で人とのつながるツールになっているところがあったということです。

◆A-GOAL：リーグが育てるもの

そんな経験をもとに、今はA-GOALという団体を立ち上げて活動しています。紹介動画があるのでご覧いただければと思います。

＜動画視聴＞

人と人をつなぐというスポーツの力を使って、お互いに困っている時にサポートし合えるような、助け合いの関係みたいなものを今後も作っていきたいというのが大きいですね。

一般社団法人A-GOAL代表の岸卓巨と申します。2011年、JICA派遣の青年海外協力隊員としてケニアで活動していました。私たちは、スポーツを通して日本とアフリカをつなげ、持続可能な社会を作るということを理念に活動しています。

具体的には、アフリカではケニアとマラウイという国を中心に活動していまして、ケニアではキベラスラムというアフリカで一番大きなスラムの中で、子供たちが犯罪に巻き込まれたり、ドラッグに走ったりすることがないように、サッカーのリーグを開いて、子供たちの健全な育成をサポートする活動をしています。

元々サッカーはケニアで人気なスポーツなんですけれども、なかなか地元の子供たちが定期的にサ

ッカーができる環境はなく、空き地でちょっとボールを蹴ったりですとか、週末に1日だけの大会があってというところだったんですが、我々A-GOALとして年間を通して子供たちが継続的にサッカーができるような場を作り、サッカーに来た子供たちに食事を提供する。食事とサッカーの2本柱で活動しています。



きっかけは2020年にCOVID-19が流行って、アフリカですごく失業者が増えた時期です。協力隊の時にお世話になっていたケニアのサッカー指導者から、何か日本からサポートしてもらえないかと言ってきたのが最初のきっかけでした。そのSOSに対して、日本にいる私たちに何ができるのか。A-GOALを緊急プロジェクトとして立ち上げて、日本でお金を集め、それを送り、現地のサッカー指導者たちが地域の人たちに配るという活動からスタートしました。

その人たちからつながった他のクラブでも、こっちの地域でも困ってるからやりたいとか、ケニアだけじゃなくてナイジェリアだったりウガンダだったり、そういった他の国でも食料支援をやったというのがあります。

全部で1万人ぐらいの人に食料を支援する活動をしました。

コロナが落ち着いてどんな連携ができるかと言った時に、サッカーリーグがしたいという思いが出て、じゃあそのサッカーリーグをA-GOALとしてサポートしながら一緒にやっていきましょうということで始まりました。

A-GOALの理念として、現地の人たちがアイデアだったり、やりたいという思いを持っているものをサポートしようという形でやっています。

ケニアではキベラスラムで子供たちをサポートする活動をしていたケニア人のケンとコリンズという2人の代表がサッカーリーグをやりたいという思いがあり、そこを我々日本からサポートするという形で運営しています。

日本サイドとしては、その活動を応援しながら、そこに必要な資金を集めたり、現地にいるボランティアとコラボレーションしながら彼らの活動を応援するような形でやっています。

週末ごとに試合をすることによって、現地の人たちは Keep Busyって言うんですけど、週末のサッカーで勝つために規律正しい生活を送ろうという意識も、子供たちやコーチたちに生まれてくるのがすごく大きいなと思います。犯罪に巻き込まれたり非行に走ったりすることを防ぐ効果もあるなと思います。

去年はタンザニアに遠征しました。スラムで生まれ育つと、外の世界に行ける、外国に行けるような機会はなく、子供たちもすごく喜びましたし、保護者も泣いて喜んだという感じでした。

サッカーリーグをすることでいろんなケースが出てきています。例えばスカウトの人が見に来て、優秀な子供たちにスポーツ特待生みたいな形で奨学金を出して学校に行けるようになった子もいます。またスラムって、火事だったり洪水だったり、いろんな災害が起きたりするんですけれども、被害を受けた子供たちや被害を受けたクラブを、リーグとしてサポートすることもやっています。困っている人たちをお互いにサポートし合える場がリーグを通してできているかなと思います。

＜動画ここまで＞

A-GOALが実施しているユースサッカーリーグは、DUOリーグをモデルとして私が提案して始めたというより、ケニア人からやりたいと言ってはじまったことです。しかし、私の頭の中にはDUOリーグがあったので、リーグ戦をやりたいと言われた時に、ぜひやりましょうと言って始めました。参加者は600人から始まり、いまはU-9、U-11、U-13、U-15、Girlsをあわせて2,108人。提供しているご飯は44,000食になります。

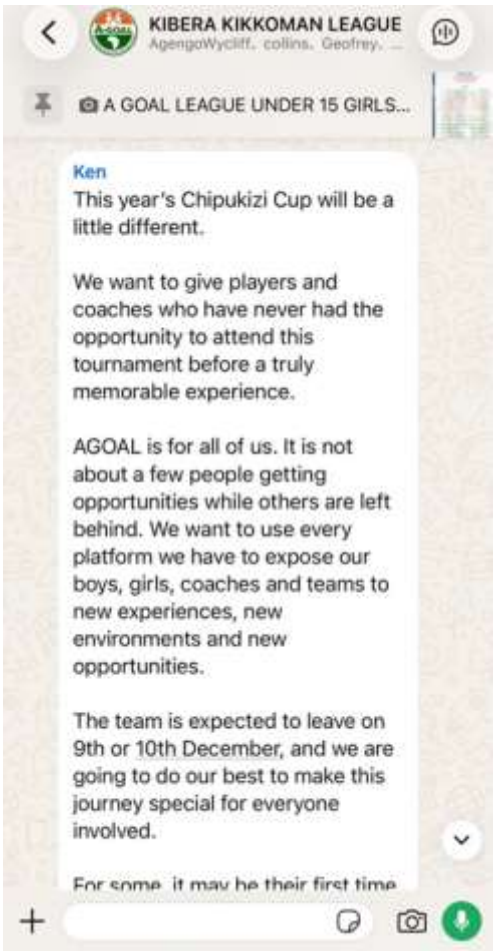
年間通してこれをやっていくにはお金がかかるので、醤油のキッコーマンさんにメインスポンサーとしてサポートしていただき、ネーミングライツで「KIKKOMAN presents Kibera A-GOAL league」の名前で活動しています。



一つひとつ説明していくと長くなりますが、リーグ戦を通して生み出しているものをみていきます。

先ほど映像にもありましたが、犯罪・非行の防止です。スラムの子どもたちには娯楽はほとんどありません。その中で、サッカーが毎週末できることが楽しみになっていますし、子供たちが夢を追いかける機会にもなっています。実際、写真のマロバちゃんはU-17 の代表チームに選ばれて、海外のクラブに行く話も出ています。





大人たちの意識変化ということでは、DUOリーグのように、リーグ戦の理念を浸透させることで変わっていくことがあります。ケニアでよくエイジチーティング、年齢が高い子を低いカテゴリーのリーグに出そうとすることがあります。明らかにこの子年上だよね、みたいな子が下の年齢のリーグに出てしまうようなことです。

スライドは、コーチたちのWhatsAppグループの投稿です。LINEグループみたいなものですが、「このリーグは勝つことが目的ではなく、子供たちを育てるのが目的だ」ということを、私がらでなく現地のケニア人指導者たち同士で言い合っています。自分たち同士でリーグの目的を確認してるのがいいなと思っています。

仕事がないということはケニアの大きな問題ですが、いま20人ほどの人たちの雇用をリーグで生み出しています。ご飯を作ってくれたり試合運営をしてくれ

たり、リーグ戦は手がかかる分、仕事の機会にもなっています。





助け合いのコミュニティだったり、日本とのつながりというところでは、最近このリーグに共感してくださった在日アフリカ人とのつながりも出てきていて、日本でアフリカの人たちとスポーツ交流する機会もできてきています。



最後は駆け足になりましたが、こんな活動もDUOリーグの副産物としてつながっているということをご紹介させていただきました。引き続きよろしくお願いします。

@A_GOAL2020

是非Instagramもフォローいただければと思います。

ありがとうございました。



井上：それでは岸さんの発表についての質疑応答に入りたいと思います。

太田：筑波大学大学院修士1年の太田と申します。質問が2点あります。

一点目は、アフリカに岸さんが出向いて活動されたり、現地の方がボランティアで活動されたりということのようですが、そのネットワークはどういう状態になっているのか、具体的にはどういう形で運営されているのかをお聞きしたいです。

二点目は、こういった形で日本から支援をし、現地の方々と一緒にサッカーを通じたよい関係を作っていくところだと思いますが、最終的なゴールとして、日本からの支援がなくてもやっていけることを目的にしているのか、それとも一緒に協力してこれからもより良いものを作っていこうとしているのか、最終的なビジョンを伺いたいです。

岸　：一つ目は、どういう態勢で運営しているかということですが、日本では一般社団法人A-GOALという形で法人化し、私もそうなんですけど、基本的にはボランティアで運営しています。

それとは別に、ケニアにはA-GOALケニアというNPOのようなものを作り、そこはケニア人たちが組織運営しながら、A-GOALケニアがこのリーグ戦をやっている形です。日本では資金の獲得だったり、あと最近はアフリカでインターンしたいという人も増えてきているので、そういう方と繋いだりしてサポートしている形です。

もう一つは、日本側が手を引き下げるのかどうするのか、どういうところを目指しているのかということですね。非常にいいを質問ありがとうございます。

国際協力の世界では、自立支援と言って、サポートをいつまでもし続けるのではなく、現地でできることは現地でやっていこうということが言われています。ただ、私はそこには疑問があって、私が目指したいのは、「ずっとつながっていたい」というところです。

というのも、30年後、50年後、もっと先になってくると、アフリカの方が成長していくフィールドですし、マーケットもどんどん大きくなるし、人口も大きくなる。一方で日本は災害があったり高齢化だったり、いろんな社会問題があります。やはり日本とアフリカの人たちが助け合える関係を築いていくのはすごく重要だと思っていて、そういう意味でずっとつながっていたいなと思っています。

ただ、その形は別問題です。もともとスタート時は100%日本で寄付を集めて送ってやっていましたが、だんだんその割合は減ってきて、今は60%ぐらいを日本で寄付を集め、残り40%はケニアの地元の人や企業、政治家とかが「この活動いいね」というところでケニア側で集めています。

あと、実際に能登で3年前に地震があった時には、ケニアから「ニュースで能登の地震を見たんだけれど、何かケニア側でできることはあるか」という連絡がありました。額として大きくありませんが、寄付を集めて日本側に送っていただいたこともあります。

今後もお互いに繋がりながらやっていきたいなと思っています。

井上：郁文館にも以前来てもらっていましたよね。多分A-GOALの初期のころだと思います。

岸　：はい。グローバル高校ですね。

井上：うちのグローバル高校がウガンダあたりとつながりがあり、岸さんに郁文館に来ていただいたことがありました。その後は特にありませんが、また何かあればぜひ。

岸　：はい。ありがとうございました。

全体を通して

井上：時間も限られてきているところですが、ここで第1部も含めた全体を通して、会場の皆さん、オ

ンラインで参加してくださっている皆さんから、ぜひ感想やコメントをいただけたらと思います。

小澤：本日はDUOリーグ30周年、おめでとうございます。三重県から参りました小澤と申します。中塚先生からFacebookに「10月10日にあるぞ！」というご連絡をいただき、今日の会を知りました。

DUOリーグ創設のころ、私は大学を卒業し、母校の城西高校にお世話になりました。教員として勤めることはできませんでしたが、「ちょっとサッカー部を見てほしい」と恩師から連絡をいただきました。試合会場でお会いした中塚先生から、「お前どっかで見たことあるな」と言われ、顔だけは覚えてもらっていたのがうれしかったです。

今日は最初から最後まで、本当に胸がときめくというか、昔を思い出しながら、このシンポジウムに参加できてよかったな、三重県から来てよかったなと、まず思います。

当時の私は城西高校サッカー部コーチという役職でした。嘱託職員であり、教員ではなかったので、顧問としてではなくサッカー部付きでやっていました。1996年に大学を卒業してサッカー部をみたんですけど、DUOリーグができることを聞き、初年度から参加したいという思いを中塚先生にお伝えしました。しかし先ほどの話の中にあった「学校」が、リーグを公式戦として認めておらず、なおかつ私は教員じゃなかったので、そういう立場の者が何を言ってるんだというような雰囲気でした。それでも中塚先生に繰り返し話をし、恩師とも相談しながら、1998年度後期からリーグに参加することができました。

2001年に三重県に行くことになりましたが、DUOリーグでいろんなお話を聞きながらやっていたことが、その後の育成環境に全てつながっていく感じでした。三重県で初めてプリンスリーグと関わることがあった時に、あれ、これってDUOリーグじゃないかという思いが生まれました。DUOリーグは育成リーグの先駆者、先駆けだったと思います。

今ではJFAから「グラスルーツ」という言葉が当たり前のように出てきますけど、当時から中塚先生は草の根、歯磨き感覚、補欠ゼロといった言葉を粘り強くというか、当たり前のように言っておられました。指導者の端くれとしてスタートしたばかりだった私にとって、本当にいい環境だったなという思いがあります。



DUOリーグが30周年を迎えるということで、この先も日本のサッカーだけでなく、瀬田さんのお話や岸さんのお話にあったように、世界につながっていることを感じます。私も三重県に帰って、できることをもっと探さなあかんなと思います。このあと中塚先生と懇親会でお話させていただき、三重に持ち帰りたいなと思っております。

まとまりのない話ですが、30周年、本当におめでとうございます。サロン2002も、このようなシンポジウムを開いていただき、ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いします。

井上：会場だけでなくオンラインの方もご感想等いただけますでしょうか。
神戸の加藤寛さん。中塚先生からご指名がありました。

加藤：加藤です。こんにちは。クラブユース連盟は50周年の行事があるんですけど、今日伺った、い

ろんな人がレベルに応じてサッカーを楽しめる環境を作りたいというのは、クラブユースを作った時の一つの考え方でした。ですから、リーグ戦だけでなくトーナメントも、レベル別に楽しめるような環境を、日本のクラブユースの人たちに作りたいと思っていました。いま、ほぼそれが実現されています。サッカー協会にも協力していただいてできるようになったのはよかったと思っています。

しかし今日の話はすごいな。DUOリーグの理念、考え方が本当に素晴らしいなと感じました。

本当に今日はありがとうございました。

井上：ありがとうございました。オンラインでも会場でも、どなたかいらっしゃいましたら。

まもなく時間になりますが。

中塚：崇正さん、いかがですか？（目で合図）

鈴木：はい、すみません、私が最後の質問者でいいんでしょうか？

鈴木崇正と申します。サロン2002の初期からのメンバーでして、中塚さんとは1961年生まれで同い年です。「1961」はひっくり返しても1961になると、同い年の劇作家・脚本家の三谷幸喜さんの舞台の台詞に出てきます。しょうもない自己紹介ですみません。

いま加藤さんのお話にもありましたが、DUOリーグは「これをやりたい」という理念先行の試みだと思います。

私はサッカーの書籍やインターネットのコンテンツを仕事にする一方で、ITメーカーのプロモーションとかマーケティングをやっておりますが、例えば企業の新しい事業開発とか製品開発では、こうした理念先行、コンセプト先行（Thought Leadershipとも言われます）によって実現することは、意外と少ないと思います。特に日本の場合、技術が先行して「こういう技術があるから〇〇をやろう、作ろう」というパターンが多いと思います。アカデミックな皆さんを前にして言うのもはばかられますけど、シュンペーターのイノベーション理論では、イノベーションは既存の要素の組み合わせによって起きるみたいなことも言われます。

しかし、DUOリーグの場合、もっとシンプルに「これええやん」「これやりたいよね」「こういうふうにならんかなぁ」という、中塚さんの思い、その強さが出発点となって30年も続くというのは、人が新しいことを起こす活動の中では珍しい成功例じゃないかと感じています。1996、97年当時、お酒を酌み交わしながら中塚さんがDUOリーグの構想をすごい熱量で語られたことを、昨日のことのように思い出します。中塚さんに代わりまして、お付き合いいただいた皆さん、ありがとうございました(笑)。すごいことです。

最後に、中塚先生に聞きたいことがあります。30年前に熱き思いを聞いた立場として、いまのDUOリーグは、当時思い描いてたことの何パーセント、あるいは何点とか、そういう表し方をするとしたらね、どれぐらいいってますか？　今日のご報告ではネガティブな副産物の話もありました。やはり道は平坦ではなかったのですね。それを最後に質問したいと思います。

中塚：会場からのラストのコメントのつもりで振ったら帰ってきました（笑）

まずその前に、小澤さんもそうだし崇正さんもそうですが、昔から中塚が熱っぽく語っていたシーンを皆さん覚えてくださっているみたいですけど、どのシーンだったかあまり思い出せなくて…。でも多分、そういうことを至るところでやっていたような気がします。そういう意味では、確かに理念先行型で、思いが強すぎて、いろんな人を巻き込んでガンガン言いまくってやっていたのだということが確認できました。

最初の10年はこんな感じで進んでいった気がするんです。ただ、10周年シンポジウムでも言った

し、先ほども言ったけど、オフィシャル化がうまくいかなかった話。なんでこんなことで、この大きなプロジェクトがストップせなあかんねん、ふざけんな、というぐらいの思いでいました。けどこれは、当時の私自身がまだ学校の部分について無知だったのだろうと思います。この国が100年かけて作ってきた学校の、学校スポーツの世界は、強固な、動かしがたいものがあったわけです。

それに倣うかのように、競技団体マターとして、競技団体の流れに乗せていったときも同じようなことになっている気がします。それがオフィシャル化の功罪ということです。

崇正さんは私に、いまのDUOリーグは百点満点で何点か言ってほしいんだろうと思うけど、点数化は難しいですね。まだ評価の中間段階だし、何点って言えるような状況でもない。



ただ引っかかりとしては、学校の中だけじゃダメだということと、それに加えて競技団体マターにしてしまうのもイマイチやなということです。

加藤さんは、クラブユース連盟がいろいろやってきたことをすごくポジティブに言ってくださって、その通りだと思います。サッカー協会も、都道府県でも全国でも、他の競技団体に先駆けてさまざまなことに取り組んでくれています。それはいいけど、どんどん真面目になっていっている。それを「遊び心」という言葉で表現しているんだけど、「ちゃんとしてないとあかん」みたいな、そういう環境になっていくことがほんまにええんかなということです。

一緒に遊んでいたはずの大人が、こういうムードに巻き込まれています。すると高校生。彼らはそもそもよくわかってません。瀬田さんですら、高校の時にはよくわかっていなかったと言うわけだから。高校生も巻き込まれっぱなしです。大人がちゃんとしたものを用意してあげればあげるほど、青少年が自分自身でものを考えることがなくなってしまう。

第1部の最後の方のスライドに出てきた、「最近いつも言ってること」みたいな。「考えろ」とか「曖昧にするな」とか。愚痴ばかりになってしまうわけなんです。

私自身、これをどう打破していったらいいのかについては、この年になってもよくわからない。これまでの30年とまったく異なる環境にいまあることは確かだろうと思います。

ドイツやケニアの様子もキャッチしながら、どうしていけばいいのかを皆さんと考えていけたらなと思います。

点数化しなくてごめんなさい（笑）

井上：ありがとうございました。

シンポジウムのお開きの時間になりました。最後に閉会の挨拶を、4代目となる、現DUOチェアマンの昭和第一高校、永井先生からいただきます。

永井：ご紹介に預かりました、歯磨き感覚でサッカーを学んだ身で元DUOリーガー、昭和第一高校サッカー部顧問の永井です。

高校3年生の時にDUOリーグが発足しました。京華高校にいました。その時の昭和第一高校は3チーム出て、三菱養和も出ています。養和には日本代表になった永井雄一郎もいました。養和に勝った記憶

がないのでなぜ優勝できたのかわからないですけど、初年度前期、最初のリーグチャンピオンです。いま教員をやって20年以上経過します。昭和第一高校に勤務しています。

当時の昭和第一高校は本当に強くて、東京でもベスト16や8に入るようなチームでした。縦割りで3チーム作って参加していました。当時の昭和第一高校がトップチームで出ていたら、京華高校の優勝はなかったかなと思っています。



話をお聞きして、30年はあっという間だったなということを実感しております。中塚先生、中澤さん、瀬田さん、岸さん、本当にありがとうございました。

DUOリーグの理念を忘れずに、補欠ゼロ、歯磨き感覚といった言葉を忘れずに。いまリーグ戦も開催中で、昇降格の真っただ中です。歯磨き感覚を忘れずにやっていきたいなと思っています。

このまま40年、50年と続けていけたらなと思っております。また皆さんにもお会いできたらなと思っております。

これをもちまして閉会の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

井上：オンラインの皆様も本当にありがとうございました。

これを持ちまして、NPOサロン2002公開シンポジウム2026-②「DUOリーグの30年を語ろう！－ユースサッカーリーグの成果と課題と副産物」を終了させていただきます。どうもありがとうございました。



DUOリーグのあゆみ－30周年シンポジウム用

2026.10.10.(中塚義実)

年度	サッカー界周辺のトピック (赤字は中塚の関わり)	DUOリーグのスローガン(太字)	★加盟クラブ／※トピック等	チェアマン
1987	ソウル五輪出場を逃す			
1988				
1989				
1990	W杯衛星放送開始(イタリア) ﾌﾟﾛｻｯｶｰﾘｰｸﾞ設立準備室第1回MTG(10月)			
1991	W杯招致委員会発足(6月) 社団法人日本ﾌﾟﾛｻｯｶｰﾘｰｸﾞ設立(11月)			
1992	ﾔﾏｻﾞｷﾅﾋﾞｽｺｶｯﾌﾟ決勝に56,000人の大観衆！ 「はやくはじまれJリーグ」			
1993	Jリーグ開幕(5月) 「ドーハの悲劇」W杯出場を逃す(10月)			
1994	W杯はテレビ観戦(アメリカ) FIFAが「フットサル」を定める			
1995	**都高体連ｻｯｶｰ科学研究会発足(～2005)** **各都道府県FAにフットサル委員会設置**			
1996	**DUOリーグ開幕(1996～2014ﾁｪｱﾏﾝ)** 2002年日韓W杯決定(5月)／アトランタ五輪(7月)	(DUOリーグ発足)	★前期：6クラブ(昭和一、筑波大附、都小石川、京華、都向丘、三菱養和) ★後期：＋3(学習院、豊南、**文京区中学生選抜**) ※後期から参加費15,000円をチームごとに徴収	
1997	**サロン2002発足(2014にNPO法人化)** **JFAnews連載「ユース年代のｻｯｶｰはいま！」**	**より良いサッカー環境を構築し、全国へ情報発信する**	★前期＋1(本郷)計10クラブ	
1998	W杯初出場(フランス)	**①普遍性の追求＝どこでもできるようにシステム化** **②DUOリーグの発展＝より良いサッカー環境の構築**	★後期＋2(城西、豊島学院)計12クラブ	
1999	**JFA指導者養成講習会・ｽﾎﾟｰﾂ社会学講師(～2012)**	**①レベルに応じた環境づくり－入れ替え制度** **②リーグ単位の自主運営制度**	★後期：＋2(郁文館、**豊島区中学生選抜**) 計14クラブ ※チーム参加費は18,000円に(2000年度から？)	
2000	TFA主催ﾚﾃﾞｨｰｽﾌｯﾄｻﾙ大会開催(2001年1月)	**2001年度より「東京都ユースサッカーリーグ」を創設すべく行動を開始する** **①リーグ戦プログラムをつくる、②前期に「フレッシュマンリーグ」をつくり1年生の受け皿とする、③審判講習会を開催する、④DUOリーグ選抜の活動を行う、⑤業務の統合と分担を進める**	★後期：+1(駒込学園)　計15クラブ ※プログラム作成に伴い、チーム参加費に加え個人登録費を徴収(500円/年)	
2001	**TFA主催U-18ﾌｯﾄｻﾙ大会開催(8月)**	**①東京都ユースサッカーリーグを早期に実現すべく行動を継続する** **②DUOリーグ"IT革命"元年とする** **③"FCDUO"構想の可能性について検討する**	★前期：+2(巣鴨、**東京大学**)、後期：+1(立教池袋)　計18クラブ ※各クラブから加盟費(5,000円/年)を徴収。個人・チーム・クラブの3本立てに	
2002	W杯(日韓共催)ベスト16。ｽｶﾊﾟｰが全試合放送	**1．組織としてのDUOリーグを確立する** **①適材適所の組織改革、②"IT革命"の推進、③"FCDUO"の立ち上げ、④リスクマネジメントの研究と実践** **2．東京都ユースリーグ創設に全力を尽くす**	★前期：+2(獨協、都豊島)、後期：＋1(淑徳巣鴨) 計21クラブ ※笹川スポーツ財団の「SSFスポーツエイド」助成事業(3年間。50万円/年) ※チェアマンのもとで事業部と管理部に分かれて業務を分担する仕組みに ※DUOリーグボランティアの誕生 ※後期から「DUOリーグ保険」に全員加入。会場に「トレーナー帯同」。「DUOリーグ選抜」の定期的活動開始。「審判評価システム」の導入。 ※後期から、チーム参加費は20,000円に	中塚義実
2003	U-18東京都ﾌﾟﾚﾘｰｸﾞ(ｻｯｶｰ)開催(4月) 日本フットボール学会発足(9月) **東京都U-18公認リーグ(サッカー)中止！(2004年3月)**	**"当事者意識"を高め、「DUOリーガー」を、「DUOクラブ」を、「DUOリーグ」を、そして「東京都ユースリーグ」を育てよう！** ◆後期は東京都第2地区リーグとしてオフィシャル化(ただしプレ大会)。従来の文京区・豊島区に加え、足立区・中央区を加えて再編。 **◆2月に都ユースリーグ総会⇒　3月に中止決定**	★後期：+7(都竹早、日大豊山、都文京、都足立工、都江北、足立学園)　計28クラブ ※文中選のOB(高校1年生)が「A.C.ｱﾝﾏﾘｱﾄｰﾚ」として前後期とも参加(1年間で休止) ※DUOリーグトレーナー制度本格導入。専門学校からトレーナー実習生派遣 ※個人登録費を500円/年から800円/年に	
2004	**東京都高体連研究部発足**／国立大学法人化 **JFAﾚﾌｪﾘｰｶﾚｯｼﾞ・ｽﾎﾟｰﾂ社会学講師(～2015)**	**"公認リーグ"のあり方を考えよう！**	★前期：+2(都足立新田、カリオカFC足立)、 **－1(東京大学)**　計29クラブ ※DUOリーグ通信のEメール送信開始。ML誕生 ※DUOリーグ初の規律問題発生	
2005	Tリーグ(都U-18リーグ)発足	**DUOリーグ10周年を成功させよう！** ①10周年記念行事を成功させよう！、②上位リーグを組織しよう！、③規約を整え組織を充実させよう！	**★前期：－1(豊島区中学生選抜)、後期：－2(カリオカFC足立、足立新田)**　計26クラブ ※次年度よりEリーグ開催(ﾘﾊﾞｰｻｲﾄﾞﾘｰｸﾞと連携) ※10周年シンポジウム開催(2005年2月17日)	
2006	W杯出場(ドイツ) **「Eリーグ」(DUOの上位ﾘｰｸﾞ)発足**	**11年目のリスタート！　原点に帰ろう！** ①リーグ単位の自主運営制度導入、②Eリーグの発足(DUOの上位リーグとして)、③地区リーグ間の連携強化(地区リーグ交流戦の開始)		
2007	Fリーグ(フットサル全国リーグ)開幕(9月) 都U-18ﾌｯﾄｻﾙﾌﾟﾚﾘｰｸﾞ開催	**レベルとニーズにあった受け皿をつくろう！** ①レベルにあった受け皿：DUO、E、地区ﾄｯﾌﾟ、T、ﾌﾟﾘﾝｽ… ②ニーズにあった受け皿：プレーヤー、レフェリー、コーチ、トレーナー、マネージャー…	★前期：＋1(**FC西巣鴨03**)　計27クラブ	
2008	第1回都U-18ﾌｯﾄｻﾙﾘｰｸﾞ(4月) 都内で自主企画の女子高生ﾌｯﾄｻﾙ大会(12月) **(若友ｻｯｶｰｸﾗﾌﾞ理事長(2008～17))**	**トロフィーを、みんなでつくろう！** ◆「トロフィーがない」プロジェクト ◆「地区トップリーグU-18東京」開始	★後期：－1(都足立工)　計26クラブ ※DUOリーグのロゴ完成。カレンダーを作成し全DUOリーガーに配布。靴磨き＆解体講習会を実施。アウォーズでトロフィーお披露目	

2009	**全国高体連研究部活性化委員会(08～19委員長)　注)2008は活性化プロジェクト**	**自分のことは自分でしよう！** ◆「スキンプロジェクト」実施 ◆ホームページをリニューアル	★後期：＋1（都荒川商）　計27クラブ	中塚義実
2010	W杯ベスト16（南アフリカ） 「Eリーグ」ﾗｽﾄｼｰｽﾞﾝ。地区ﾄｯﾌﾟﾘｰｸﾞにDUO直結 **筑波大学に五輪教育の組織(CORE)設置**	**歴史から学ぼう！** ◆「スキンプロジェクト」引き続き実施 ◆DUOリーグ選抜交流戦の見直し	**・最後のEリーグ（翌年度からはDUO1部と地区トップリーグが直結）**	
2011	なでしこジャパン世界一！（8月） 東西プレミアリーグ開始（4月） DUOから頂点までU-18リーグがつながる	**がんばろう、ニッポン！ーサッカーを愛する人にできること** ◆リーグ構造の再編ー底辺から全国まで ◆東日本大震災の影響で前期日程変更相次ぐ ◆スキンプロジェクト改め「リサイクルプロジェクト」へ ◆技術部による新たな試みーストライカー&GK講習会およびﾘﾊﾞｰｻｲﾄﾞﾘｰｸﾞ選抜との交流試合 ◆DUOリーグの運営そのものに対する問題噴出ー将来構想プロジェクトの設置へ	★前期：＋1（中大高）計28クラブ ※JFAによる第2種年代の「リーグ戦文化の推進」はほぼ完成。頂点のプレミアリーグから各都道府県リーグまでつながる。DUO1部は、前期は並列2リーグ制、後期は上位・下位に分かれ優勝チームが昇格権を持つ形となる	
2012	**U-18ﾌｯﾄｻﾙの全国プレ大会（3月）** **『高校サッカー90年史』発行（7月）**	**温度差をなくそう！** ◆将来構想委員会(全6回)にてDUOリーグのあり方について幅広く議論 ◆技術部は指導者講習会(指導実践)を実施 ◆リサイクルプロジェクトは「靴磨き講習会」を実施 ◆医科学活動推進部はテーピング講習会、栄養講習会を実施	**※DUO会議で以下の方向性が決まる** ①2013年度以降、「上へつながる」リーグは“前期”のみ行う(FA加盟であればDUO未加盟であっても参加資格を持つ)、②“後期”には「上へつながらない」、DUOリーグ独自の競技会を新たに実施する、③組織としての「DUOリーグ規約」を明文化しメンバーシップを確立する、④2013～14年度のチェアマンは引き続き中塚義実とする(ただしこれがラスト) ※「個人登録費としてでなく、プログラム代を冊数に応じて徴収する」「DUOの業務遂行に対する謝金をしっかり払う」「DUOリーグ保険は2012年度を最後に撤廃する」などが決まった	
2013	都女子ﾕｰｽﾌｯﾄｻﾙ・ﾌﾟﾚ大会（3月）	**歴史を踏まえて歴史を築こう！** ◆DUOリーグの大改革 昇降格のあるリーグ戦は前期のみ 後期は「フリーサイズフットボール」 ◆各担当による講習会が定着 技術講習会、靴磨き講習会、栄養講習会など	★前期：＋2（都足立西、都千早）、 ー1（都豊島）※前期リーグは参加　計29クラブ ※後期「フリーサイズフットボール」のワンデー大会を5回開催。最終日は各大会優勝＋αでﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼｯﾌﾟを8対8の半面マッチで実施(筑波大附)	
2014	W杯（ブラジル）出場 第1回JFA全日本U-18ﾌｯﾄｻﾙ大会	**DUOリーグの代替わりー歴史をつなごう！** ◆2014年度をもってチェアマン交替 ◆事務居郁機能の委託	※新チェアマンのもとで人事や制度の見直し ※2014年度中にNPO法人化したサロン2002へ事務局を委託。リサイクルプロジェクトも同法人主催で実施。DUOは共催または協力の形で展開 ※後期「ﾌﾘｰｻｲｽﾞﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ」のワンデー大会を6回開催。最終日は各大会優勝＋αでﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼｯﾌﾟを8対8の半面マッチで実施(筑波大附)	
2015		**DUOリーグの次なる一歩へ歩を進めよう！** ◆2015年度よりチェアマン交替 ◆事務局機能の業務委託契約の締結 ◆2016年度に3部リーグとして開催するための準備年度	★前期：＋4（都豊島、貞静学園、都淵江、都足立新田）　計33クラブ ※後期「フリーサイズフットボール」のワンデー大会を4回開催。最終日は各大会優勝＋αでﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼｯﾌﾟを8対8の半面マッチで実施(筑波大附)	岩野英明
2016	**U-18ﾌｯﾄｻﾙﾘｰｸﾞﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｽﾞｶｯﾌﾟ開催（2017年1月）** **筑波大学蹴球部創部120周年**	**リーグ戦のあり方を再考しよう！** ◆3部リーグ制のスタート ◆試合時間を延長 ◆後期「フレキシブルリーグ」の実施	※1部10チーム、2部20チーム、3分16チーム ※1部リーグは45分ハーフ、2部・3部は40分ハーフに延長 ※後期は「ﾌﾘｰｻｲｽﾞﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ」(開催は1回のみ)と「ﾌﾚｷｼﾌﾞﾙﾘｰｸﾞ」(3ﾌﾞﾛｯｸ計20チーム)を実施。最終日は各ﾌﾞﾛｯｸ優勝とﾌﾘｰｻｲｽﾞﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ代表によるﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼｯﾌﾟ(本郷)	
2017	**日本部活動学会発足（12月）** 都女子ﾕｰｽに「渋谷109」が冠に（2018年1月）	**あたりまえの共有をしよう！**	※3部リーグ制の2年目。1部10チーム、2部20チーム、3部16チーム ※後期「ﾌﾘｰｻｲｽﾞﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ」は3回、「ﾌﾚｷｼﾌﾞﾙﾘｰｸﾞ」は2ﾌﾞﾛｯｸ計13チーム。最終日は各ﾌﾞﾛｯｸ優勝とﾌﾘｰｻｲｽﾞﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ代表によるﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼｯﾌﾟ(本郷)	
2018	W杯（ロシア）ベスト16 **『高校サッカー百年』刊行**	**大人が楽しくなければ子供も楽しくない！** ※DUOリーグ指導者研修会・八丈島サッカー協会交流会（8/26～28八丈島）	※3部リーグ制。1部10チーム、2部18チーム、3部16チーム ※後期「ﾌﾘｰｻｲｽﾞﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ」は3回、「ﾌﾚｷｼﾌﾞﾙﾘｰｸﾞ」は2ﾌﾞﾛｯｸ計15チーム。最終日は各ﾌﾞﾛｯｸ優勝とﾌﾘｰｻｲｽﾞﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ代表によるﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼｯﾌﾟ(京華浦和)	
2019	都内で自主企画の高校生女子ﾌｯﾄｻﾙﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｼﾞｯﾌﾟ（5月）	**自主運営の再確認。ひとりひとり責任を持って。**	3部リーグ制。1部10チーム、2部17チーム、3部14チーム。	
2020	新型コロナのパンデミック 高校総体中止。TOKYO2020延期	（コロナ禍で開催なし）		
2021	東京でオリパラが無観客で開催 WEﾘｰｸﾞ開幕（9月）	（コロナ禍での再開初年度）	★前期：＋1(東洋大京北)、休会(文京区中学生選抜)、ー1(都荒川商) ・3部リーグ制。1部9チーム、2部16チーム、3部14チーム。	
2022	W杯（カタール）ベスト16。ABEMAで配信			嶋野雅春
2023	コロナの5類移行。Afterコロナの時代へ。 東京都U-18女子ﾌｯﾄｻﾙﾘｰｸﾞ開幕 部活動の地域移行（展開）元年			
2024				
2025				
2026	W杯（北中米）ベスト32			永井直樹